145 伊勢崎と大胡間の県道開通

往時、伊勢崎と大胡間の往来について、伊勢崎から大胡へ行くには下飯土井から江竜川右岸道を北進し新井の北辺に出る。そこから西へ十二天の集落へ向かい、その集落をすぎてから田圃道を斜め北に行き元内田医院前に出る。西へ向かって進むと二宮赤城神社前に出て、西へ約二〇〇〇㍍地点を右折する。北へ向かって進み坂を登りつめると女堀沼に出会う。左右の沼を見ながら田圃道を斜めに荒口東辺から荒子の辻を通過し、西泉沢を経て大胡へ至る。かなり曲がりくねった不便な道程であった。大正八年十二月十五日、道路建設を要望する荒砥村民大会を開催し、陳情のため大挙して県庁へ行った。荒子の飯島恒治県議は伊勢崎の平田吾郎県議と協議し新県道開発を県へ推進した。

大正十四年三月に工事が着工され開通式典は翌年五月八日大胡の千貫沼沿岸で挙行された。荒砥村の人達はその功績に対し、当時この道を飯島県道と呼んでいた。後に伊勢崎・大胡間はバスの運行が開設されたが自動車の普及に伴い廃中止された。また、東武鉄道は県道沿いに伊勢崎・大胡間の鉄道敷設を計画したが実現には至らなかった。なお、当時の県道敷地の買上げ価格は、一反（約千㎡）当り畑は四百円、田は五百五拾円、山林は二百円、宅地は一千円であった。

＊城南公民館だより「城南」平成29年4月15日発行

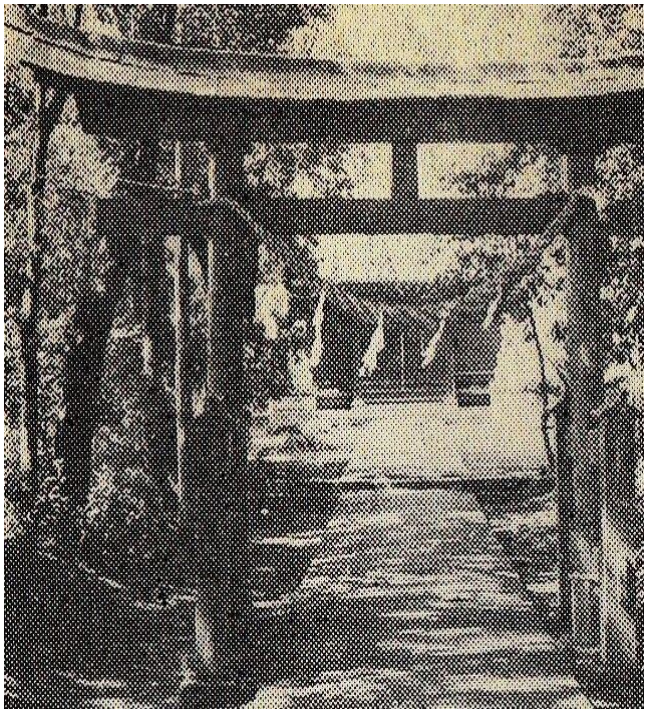
北関東道を過ぎ二之宮十字路へ向かう

146　細野天神と両毛線（下増田町）

下増田町にはかつて天神社（菅原道真を祭神）があり、字阿久津の細野一族が祀っていたことから細野天神と称されていた。一月二十五日の祭礼には多くの参詣者で賑わったが、ある時、竜巻によって天神社の扉は空高く巻きあげられて、利根郡追貝村（沼田市利根追貝）まで飛んで行ったという。それが下増田村の天神社のものであることが分かり、地元の人たちは「扉天神」と名付け祀ったとの伝承が残っている。

明治二十二年、新前橋・小山間に両毛線として鉄道が敷設された。養蚕は飼育回数によって年三回から四回の収入が得られ農家にとって大変魅力あるものであった。その結果、生糸と織物の物流が盛んになり鉄道が敷設されたのであった。その際、蒸気機関車が吹き上げる火の粉による民家の火災を防ぐため、近接する家は瓦屋根に葺き替えるよう推進しそのための補助金が支給されたという。しかし大正三年の春、余りにも線路に近接していた天神社は蒸気機関車の火の粉により焼失してしまった。その後、社は再建されることなく天神と言う地名のみが残っている。

＊城南公民館だより「城南」平成29年5月15日発行



在りし日の細野天神の鳥居より社殿を望む

147 大山信仰 ①（筑井町）

近戸神社境内に、唐破風入母屋造で文化六年（一八〇九）造立の石祀がある。社額からは社号は読み取れないが、「大山社」と伝承されている。大山社の本源は神奈川県伊勢原市内で「相模の大山」として、古来より山岳神道の聖地として信仰されている。

天平勝宝四年（七五二）、良弁僧正が不動堂を建立し神仏習合され「雨降山大山寺」と号し仏教系の霊場となった。その後、鎌倉幕府の初代征夷大将軍に任命された源頼朝は社領を寄進した。その後、江戸幕府の第三代征夷大将軍に任命された徳川家光は巨費を献じて社殿を改築した。相模の大山はもともと雨が降ることを乞い願う雨乞いの聖地で、雨降山とも称されていた。水利が整備されていなかった江戸時代には、雨乞いのための農民の講が各地に多く成立し篤い信仰を受けるようになった。

慶応四年（一八六八）三月、明治政府が目指す国家神道政策により「神仏判然令」が発令された。すると千年も続いた神仏習合で一体として信仰されていた神仏が分離され、やがて廃仏毀釈運動が起こり各所で仏堂・仏像など仏教系の施設や物が破壊された。そして「大山社」は「阿夫利神社」と改称され神道化が謀られた。

＊城南公民館だより「城南」平成29年6月15日発行

148

大山信仰 ②（筑井町）

近戸神社境内に「石尊大権現」、「大天狗」、「天狗」、「文政三年（一八二〇）」、「若者」と刻銘された灯籠がある。石尊大権現とは、標高一二五二㍍の雨降山で雨乞い信仰の神として多くの農民や民衆に深く信仰を受けている。つまり大山信仰と全く同一の信仰であり、山頂の霊石を石尊大権現と称した。祭神は大山祇大神で、摂社（本社に付属する神社）は大雷神（大天狗）、高靈神（小天狗）を併せ信仰した。

筑井町では毎年七月二十四日に水垢離の儀式が行われる。桃木川の筑井大橋に注連縄を張り、自治会役員はその下の河原に降りて川に入る（現在は入らない）。川上に向かい「さんげ、さんげ、六根清浄」と言いながら水をすくい上げる。「さんげ」とは「散華」のことで、蓮華の花びらを撒いてその場を浄めること。「六根」とは、人間の迷いの根源となる「眼・耳・鼻・舌・身・意」を表す。それら六根を清浄にし、身体に冷水を浴びせて清め流し穢れを取り去る行為が水垢離である。夜には石尊大権現の灯籠に火が点され町内の氏子の人達は神社に集まる。水垢離の行事は水田稲作の旱魃時に降雨を願い豊作を祈願する農民の祭儀である。

＊城南公民館だより「城南」平成29年7月15日発行

149 山際の辻念仏（西大室町）

大室小学校から北へ約二〇〇メートル地点に、元治元年（一八六四）の「諸厄神」、明治三十二年（一八九九）の「諸疫神」、造立年不明の「疱瘡神」を刻んだ石塔がある。山際地区では毎年、八月一日・四日・七日（以前は七日間）に、六ヶ所の辻で子供を中心に辻念仏が行われている。灯籠を灯し太鼓・鉦を鳴らし、「ナンマイダー（南無阿弥陀仏）」と念仏を唱える。大きな数珠を繰りながら頭に数珠の母球を触れると、疫病などの大病にかからず、無事に夏が越せるとの伝承がある。太鼓や鉦を打ち鳴らすのは、その音によって疫病や悪霊や悪障などを寄せ付けないとされている。

古くから厄病・疫病・悪霊などは人が往き来する道路から集落へ入ってくると考えられていた。従って、道路の辻は特に大勢の人が往来することから、辻で念仏を行うことで疫病・悪霊・悪障などの悪障が防げるとされて行われてきた。医療が発達していない時代は、疫病などにより幼児は亡くなることが非常に多かった。特に夏の暑さから身を守り夏越しすることは極めて厳しいものであった。それを越えるため集落の人々は絆を保ちながら辻念仏を行い祈願した。

＊城南公民館だより「城南」平成29年8月15日発行

諸疫神塔

諸厄神塔

疱瘡神塔

150　宮東の庚申信仰（二之宮町）

東街道の路傍に庚申塔があり、裏面に「寛政十二年（一八〇〇）十一月吉日」の刻銘がある。宮東地区の庚申信仰の講により建立されたものである。干支の十干・十二支で庚申の年、庚申の日の夜に、人体の中にいる三尸という虫が抜け出し、日頃の罪過（法律や道徳に背いた罪と過ち）を天帝に告口する。すると、その罪の重さによって寿命が縮められてしまうという。そこで人体から三尸の虫が抜け出して天帝に告げ口しないよう、庚申の夜は講の人達は御馳走を食べながら朝まで眠らず、一番鶏の声を聞くまで過ごすのを「庚申待」という。延命を祈願するため江戸時代には各地に庚申講が結成された。

庚申塔のとなりには庚申の主尊である青面金剛塔が建てられている。忿怒の形相をしており、頭部には蛇を巻き付け、虎皮の腰巻をつけるいかめしい姿である。第一手は胸前で金剛合掌印を結ぶ。左の第二手は羂索（五色の縄）、左の第三手は弓、右の第二手は宝剣、右の第三手は矢を持っている。その足下には向かって右より「不聞、不言、不見」の三猿が彫られている。これは庚申待の日は身を慎むことを表現している。建立年の刻銘はないが、隣接する庚申塔より古く江戸時代中期の塔である。

＊城南公民館だより「城南」平成29年9月15日発行

庚申塔

青面金剛塔

151 荒砥富士山古墳（西大室町）

富士山霊園に東接し存在する円墳で、『上毛古墳総覧』の荒砥村第一五〇号墳である。直径は三十六㍍、周堀を含めると四十九㍍を測る。墳丘の高さは三㍍、四段築成で各段の斜面には葺石が施されていた。埋葬施設は、両袖型横穴式石室で前庭を有する。石室の規模は全長五・三六㍍、羨道（通路）の長さは三㍍、玄室（墓室）の長さは二・三六㍍である。また羨門・玄門に扉石が施されていたことが裏付けられる県内初の古墳である。出土遺物は、石室内から鉄鏃、前庭部から土師器、須恵器、銅鋺が出土している。出土遺物と石室構造などの特徴から七世紀末の築造と考察されている。

なお、この古墳の玄室は八角形をなし類例は極めて少ない。八角形は四方と八方など総ての方角を現すことから、それは円としても捉えられていることで古くから縁起の良い形とされていた。たとえば奈良県にある法隆寺の夢殿は八角円堂と称されている。奈良県明日香村にある第四十代の天武天皇陵、第四一代の持統天皇陵、第四二代の文武天皇陵は八角陵である。なお、天皇即位の大礼の際に於いては、天皇は八角形の「高御座」に、皇后は八角形の「御帳台」に入られて式が行われている。この古墳は平成三年、県営圃場整備事業に伴い県教育委員会文化財保護課によって発掘調査された。平成四年に石室の構造の特徴や保存状態がよいことから県指定史跡を受け現状保存された。

＊城南公民館だより「城南」平成29年10月15日発行

152 浄瑠璃人形（泉沢町）

明治二十年頃、上坂角太郎という人が阿波（あわ）（徳島県）から流れて泉沢へ住み着いた。その後、角太郎は阿波から持ってきた人形を使って「人形芝居赤城座」を組織し興行するようになった。それは近郷や近在で評判となり、やがて関東各地で興行を行うようになる。語りは竹本理太夫（飯土井の吉田広蔵）、竹本豊後太夫、三味線は鶴沢一勇（西大室）、座員は上坂角太郎、喜楽長太郎、石田弥太郎、吉田増次郎、吉田米吉、須藤竹次郎、石田幸吉、山田豊次郎らで歌舞伎狂言などを演じ好評を得ていた。しかし、大正十二年（一九二三）の関東大震災により東京やその周辺は大きな被害が発生した。それにより被害を受けた人々の生活は一変した。景気も著しく落ち込み「人形芝居赤城座」の巡回興業も大きな影響を受けることになり生活は成り立たなくなり赤城座は解散になった。

泉沢へ残った人形のうち十三個は人形師初代天狗久（てんぐひさ）の作で、全国で五十個以上あったと思われるが現在は半分位が失われている。吉岡久吉は安政五年（一八五八）阿波に生まれ、十六歳のときに人形師・若松屋富五郎に弟子入りする。その後、独立し天狗屋久吉（てんぐやひさきち）といい人形師の第一人者で、文楽の世界で天狗久の人形は宝物扱いされている。

平成六年、この人形は「泉沢の人形附（つけたり）小道具等一括」として市重要民俗文化財の指定を受けている。

＊城南公民館だより「城南」平成29年11月15日発行

浄瑠璃人形（『新版 前橋の文化財』より転載）

153 本郷の荒神宮（小屋原町）

本郷南東部の小高い所に荒神の社が祀られている。荒神は荒れやすく崇りやすい神、すなわち荒振る神である。他に対して強い障礙（さわり）の力を発揮すると同時に、一方では福徳をもたらすという両方の力を有していた。つまり荒神は除災・招福の仏法守護神として崇められている。

荒神信仰は、西日本、特に瀬戸内海沿岸地方で盛んだったようである。奈良時代から平安時代に活躍した修験者の役小角が金剛山（大阪府・奈良県）で修行中、頭に宝冠を載せ怒りの相を示す三面六臂（頭部に三つの顔、六本の腕を持つ）姿の荒神に出会ったという。

屋内に祀られる「三宝荒神」は、修験者や陰陽師などの関与により、火の神や竈の神、仏教、修験道の三宝荒神信仰が結びついた。一方、屋外の「地荒神」は、山の神、屋敷神、氏神、地神として地域の守護神、また作神として稲作農耕の神として信仰されている。

なお、荒神信仰が広く信仰されるようになったのは江戸時代前期頃からである。荒神様の縁日は八月一日で前夜に灯籠祭りが行われている。社殿の裏には小屋原町指定天然記念物の樹齢三百年を超えるトチノキがある。

＊城南公民館だより「城南」平成29年12月15日発行

荒神宮と後方にトチノキがそびえる

154

今井の城峯社（今井町）

今井神社古墳の南裾に城峯講の人達によって信仰されていた城峯宮が祀られている。城峯神社の本源は、埼玉県児玉郡神川町矢納の城峯山に鎮座する郷社である。城峯信仰は火災・盗難などの災難厄除けに御利益があるといわれ、江戸時代頃より庶民に広まっていった。城峯とは平将門が関東を一望できる山へ城を築いたことからそう呼ばれるようになったという。

平将門は平安時代前期末頃に下総国（千葉県北部）に生まれ、一時期に都へ上り藤原忠平に仕えていた。それは検非違使（警察・軍事担当の官職）に就くことが望みであった。藤原忠平は第六一代朱雀天皇の御世に摂政、後に関白を務めていたが、将門の望みは叶うことなく帰郷した。鎮守府（東北鎮圧官庁）将軍であった父・平良持の死後、伯父・平良兼らが私領を侵したため合戦になり、勢い常陸国府（茨城県）など次々と襲った。さらに上野国府にも及びついに関東七カ国を制圧した。将門は天慶二年（九三九）自ら「新皇」即位の儀式を行い関東の独立を宣言した。しかし、翌年に朝廷による追討令が出され藤原秀郷・平貞盛によって討滅された。秀郷は将門の城があったという山へその霊をねんごろに祀り、この社は城峯神社と号された。

＊城南公民館だより「城南」平成30年1月15日発行

155 宮原の名号塔（上増田町）

宮原の薬師堂境内に存在し、正面に「南無阿弥陀佛」、右側に「元禄五年（一六九二）」、左側に「正月吉日」と刻銘されている石塔がある。「南無」は仏への絶対の帰依（服従しすがる）や敬礼（敬意現わす）の意を表し、「阿弥陀仏」は「阿弥陀如来」を表す。つまり、南無阿弥陀仏とは阿弥陀如来を敬い、信仰し絶対服従することを表し、この様な塔を名号塔という。

法然上人は平安時代後期に生まれ、天台宗の比叡山に修行し四十三歳の時、念仏を唱えることによって往生できると確信し浄土宗を開いた。それは、当時の仏教価値体系を根底から覆すものであった。それは専修念仏という専ら念仏を唱えることにより極楽往生できるというものである。その安易さから多くの衆生から支持を受けるようになった。その背景には今後しばらくは悟りを開く者が現れず、仏教が衰えるという末法思想が流布したことにあったようである。時あたかも貴族政治から武家政治の鎌倉時代への変遷期で、次第に戦乱などによる世情不安定な社会状況下でもあった。浄土宗は安易に自力で本願を得られるという教えから、戦に向かう多くの武士からも信仰されたのである。江戸幕府が開かれて戦国の世は戦乱が治まりまでは殆どの武士は浄土宗を信仰していた。

＊城南公民館だより「城南」平成30年2月15日発行

156

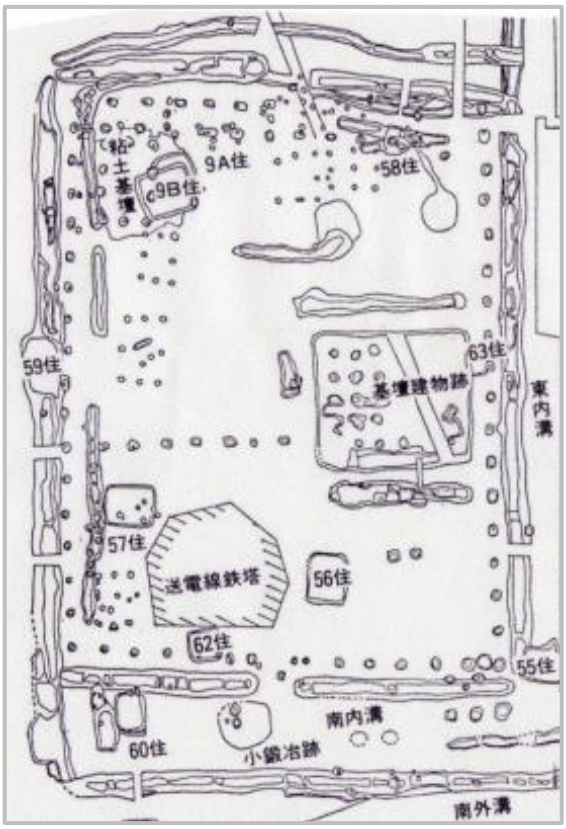
上西原遺跡（下大屋町）

昭和六十年、県営圃場整備事業に伴う発掘調査により産泰十字路の北西地区から、竪穴住居八十軒余り、掘立柱建物、井戸、溝、窯、小鍛冶などの遺構が検出された。中央部分に基壇（建物の下に土を盛った壇）を持つ建物があり、周辺から文字を押印した瓦、塑像（粘土でつくった像）、銅製飾金具、緑釉陶器、また百点余りの鉄釘や瓦塔（木塔を模した焼き物の塔）が出土した。遺物の中に「勢」の文字が押印された瓦が二十点ほどあり、「勢多郡」を表しているとされている。なお、瓦の供給地は笠懸古窯群と考察されている。

竪穴住居からは奈良三彩の小壷や古手の灰釉陶器、さらに「寺」「上寺」「経」「秦」「部」「大・守」「大」「見」「仲」「目」と書かれた墨書土器が百数十点出土している。奈良三彩は、奈良時代に唐三彩の影響下に焼造された国産の陶器で、器面には緑・黄・白の釉がかけてある。

この遺跡は一般的な集落遺跡と全く異なる遺構や構造で特殊な遺物が多い。郡衙（律令制の郡役所）の正殿やそれに伴う施設は調査区内では検出されていないが、「勢」の押印瓦は勢多郡衙との深い関係を示す遺跡であると考察されている。

＊城南公民館だより「城南」平成30年3月15日発行



堀囲いの中に基壇を有する施設
（『図説前橋の歴史』より）

157　吹地の大通龍碑（富田町）

吹地寮（正法院境外施設）裏手のやや小高い所に「大通龍」と刻字された石碑がある。左に「吹地組中」、右に「昭和六辛未年」と刻まれている。今から八十七年前の昭和になってから吹地の人達によって建てられたものである。

龍はインド神話で、蛇が神格化した人面蛇身の神で大海に住し、雲雨を自在に支配するとされている。古代中国では海や雨をつかさどることから、航海の守護神や雨乞いの神として信仰されている。なお『古事記』、『日本書紀』に、海神の娘・豊玉姫が火遠理命（山幸彦）と結婚し、御子を出産する際に龍に化し、出産を見ることを禁じたが命に見られたことを恥じ、児を草で包み海辺に捨てて海への途を閉ざし海神のもとへ帰ったという、説話がある。

吹地集落の東辺を絶えることなく滔滔と流れる大泉坊川は人々たちから清らかで神聖な川であるとされ、やがて水神信仰されてゆくようになった。なお、この川には水の精霊である龍が棲んでいるという信仰が生まれた。ある時、吹地に疫病が流行り村人はすっかり疲弊してしまった。そんな時、大泉坊川から龍が現れ病を治してくれたという伝承が伝わっている。吹地の人達は龍がいつも大泉坊川を往き交い吹地の人たちを護って欲しい、という願望や祈願から「大通龍」という碑を建立したのであろう。毎年四月十六日に祭りが行われている。

＊城南公民館だより「城南」平成30年4月15日発行

158　大乗妙典日本廻国塔（二之宮町）

二之宮町の南端部に新土塚城跡がある。その一角に樹木に覆われた高まりが新土塚古墳である。この古墳は円墳でそこに登ると遠方まで見通せることから、往時は新土塚城の物見台として使われていた可能性が考えられる。後に墳頂部に文殊尊が祀られた。その参道の裾部右側に「大乗妙典日本廻国塔」が建てられている。廻国塔には右側に「享和二（一八〇二）壬戌十一月立」、中央右側に「天下和順」、中央に「奉納大乗妙典日本廻國」、その左脇に「日月清明」、「上野州勢多郡二宮邑　松井喜傳治」の刻銘がある。

大乗妙典とは法華経のことで、それを六十六部書き写し、代表的な社寺六十六ヵ所を巡り、一部ずつ奉納し行脚する修行のことである。俗に六十六部廻国といい、なお略して六部とも呼んでいる。六十六部奉納の目的で遍歴する行脚僧の風習は鎌倉時代頃にはすでに行われていた。後に江戸時代になると広く一般化し、その難事業を果たした記念に建てたのが六十六部廻国供養塔である。

なお大乗仏教は日本など東アジアの北伝仏教である。それは「多数の人を乗せる」の意味で、すなわち一切衆生（生きとし生けるすべて）の済度（救い悟りを開かせる）を目指す仏教である。一方、小乗仏教は、自己の解脱だけを求める仏教である。

＊城南公民館だより「城南」平成30年4月15日発行

159

八坂用水の取水口（筑井町）

桃木川に架かる藤岡・大胡線の筑井橋から上流約一六〇メートル地点に八坂用水の取水口がある。元来、この取水口は、江戸時代初めに増田村東組の北爪五郎右衛門によって掘削された用水堀（五郎右衛門堀）への取水口であった。桃木川に堰を架けて水位を上げ、安定した水量を得て五郎右衛門堀へ流し、荒砥川西側を南流する既存の増田堀へ落し込み増田村の水田を潤した。この桃木川の堰は五郎右衛門堰と呼ばれていた。

伊勢崎領の水田は常時水不足が続き米の収穫は期待できない状況が続いていた。そのため財政は困窮を極め、収穫量の七割が年貢という過酷な重税に農民の領主への直訴が頻発した。それを打開するため、五郎右衛門堀に着目し小畠武尭を奉行として、その堀から伊勢崎領へ引水する計画を策定した。筑井村・増田村・二之宮村と協議書を取り交わし用水路の工事を着工した。測量に三ヵ年を要したが、掘削工事は一ヵ年で完了し宝永三年（一七〇六）に竣工した。八坂用水開削以前の伊勢崎領の年貢米は、約一六、三八〇俵、用水完成後は二〇、九〇〇俵で、四、五二〇俵も増収した。

＊城南公民館だより「城南」平成30年6月15日発行

160 八坂用水の頌徳碑（華蔵寺公園）

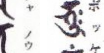
八坂用水の完成から一〇四年が経過した文化七年（一八一〇）、その最大の功労者である小畠武尭を頌徳（善行をたたえる）する建碑が取り沙汰された。しかし、その多大なる称賛の声が他の家臣の妬みを生み、建碑には至らなかった。その後、伊勢崎町・茂呂村・三郷村の三町村から、八坂用水の開削はこの地域にとってこの上なく甚大な功績であった、という声が再び高まった。そして三町村の協力により、明治四十三年十月に華蔵寺公園に建碑された。その際、文化七年に作成されていた伊勢崎藩家老の関重嶷と磯田邦光の撰文が使われた。八坂用水の完成から実に二〇四年の歳月を経ていた。

碑文に「伊勢崎酒井侯の封内、稲田數千畝は、水を受くる所無く、民の業に苦しむこと久し。寶永三年丙戌、郡奉行の小畠武尭は郡吏（郡役人）と謨り、溝渠（水路）を封内の田水の用に充てぬ。各所に水棚を設くるに大小四十有八、神沢川に迫り水道（木樋）を川の上に架し八坂村に至る。爾來、郡中田の利を獲て、肥沃と爲るは計三千余石。今に至りて郡の衆民、相い与に、其の徳を謳謡（称賛）し忘るゝに能わず。侯家（殿様）も亦その巧を愛慕すること衰えず。遂に臣等をして、其の事を石に勒み之を樹て、以て不朽に垂る。」と刻まれている。

＊城南公民館だより「城南」平成30年7月15日発行

161　光明真言曼荼羅塔（飯土井町）

基壇上に長円形の中台を積み、それには格狭間が施され、その上に円盤状の塔身が載る梵字の光明真言破地獄曼荼羅塔で、飯土井町公民館の敷地内にある。

塔身の中央に「 （浄土変）」、塔中央の下から右廻りに「 （光明真言）」、続いて四文字「  （破地獄）」と梵字で陽刻されている。ただし、この塔は光明真言の前に「浄土変」、最後に「破地獄」が付加されているのは光明真言破地獄曼荼羅であるという。つまり死者を怨霊悪鬼にさせないで、その罪障（罪と過ち）を僧が背負い消滅することを現している。光明真言は、「宇宙を支配される大日如来様、私たちの進む道を無量の光で遍く（すべてにわたって広く）照らして下さいませ」という意味だという。

なお、塔身の中央下に「高歡」、裏面に「鼻毛石村　赤城寺七世　文化十一甲戌（一八一四）九月　施主筆第取子中」の刻銘がある。今年の五月まで存在した公民館の建物は、本来は西大室村の観昌寺境外施設であり、この塔はそれに因む石仏である。真言宗赤城寺（旧宮城村鼻毛石）と観昌寺は古くから深い縁があった。

＊城南公民館だより「城南」平成30年8月15日発行

塔身部の梵字拓本

光明真言地獄
曼荼羅塔

162　荒砥川改修記念碑（下増田町）

昭和二十二年、マリアナ諸島の東方に発生したカスリン台風は、九六〇㍉、最大風速四〇㍍で、勢力は次第に弱まりつつあったが房総半島をかすめ北上した。しかし、その際に前線を刺激した九月十五日、赤城山麓の降雨量は五〇〇㍉を超えた。荒山に源を発する荒砥川は大量の雨により大洪水が発生し堤防が決壊した。そして大胡町やその下流域に甚大な被害をもたらした。翌、二十三年九月十六日にはアイオン台風の大雨で荒砥川は再び氾濫し、周辺の水田は二年続きで米の収穫は皆無（かいむ）状況になった。

碑文の概要は、「吾が木瀬村は荒砥川の下流である故、一面は泥海と化し悲惨でその状況は一層激甚である。耕地流失と埋没水田は、四〇町一段九畝十五歩、床上浸水の家屋は上増田六十三戸、下増田百四戸、流失及全壊家屋各一戸と云ふ状態である。村では荒砥川改修促進委員会を組織し、協議のうえ県や建設省に度々陳情し、遂に国費で昭和二十六年十月改修工事が着手され、三十年五月完成した。このことを永く伝えるため竣工の式典を挙行し茲に建碑する」。撰文は当時様々な対策に労苦した北爪喜太郎村長である。

＊城南公民館だより「城南」平成30年9月15日発行

163 古塚原碑（荒口町）

阿部耕太郎は幼少より学問を好み、江戸へ出て久留米藩の侍講（藩主に講義する）・岡永松陽の門に入り専ら漢籍（漢文）を修め、故郷へ私塾「耕讀堂」を開き耕雲を号した。耕雲の師である松陽は後に侍講を辞し旅に出て、やがて耕雲家の食客となった。明治二年、病により逝去したが阿部家により手厚く葬られた。松陽と耕雲との交わりはおよそ三十有余年、耕雲宅を我家のごとく過ごし、そして家人も温かく迎えていた。

松陽が撰文した碑の読み下しは「上州勢多郡荒口村は野が広く、林がまばらにあり小さな家が接している。草茂り露多く、雀騒がしくさえずる。翁（耕雲）は馬を飼い童は魚を捕り野は趣あり絵のよう。我が友阿部耕雲、その家は農家で読書を好む。いつも田畑を耕し、真田舎の雅人である。安政四年（一八五七）四月、村の西の田んぼに鋤音が響く、田んぼの高い所を桑畑にしようと掘る。沢山の石の傍に古い鏡と土器や武具が数個あった。これは昔の王侯貴人の遺体を葬った所（古墳）と分かる。耕雲の子は憐れに思い埋め戻した。碑を建てこのことを記す。この里は草深い野であるが、こんな所にこのような物を使う人がいたのであろうか」、と記され碑は赤城神社境内にある。

＊城南公民館だより「城南」平成30年10月15日発行

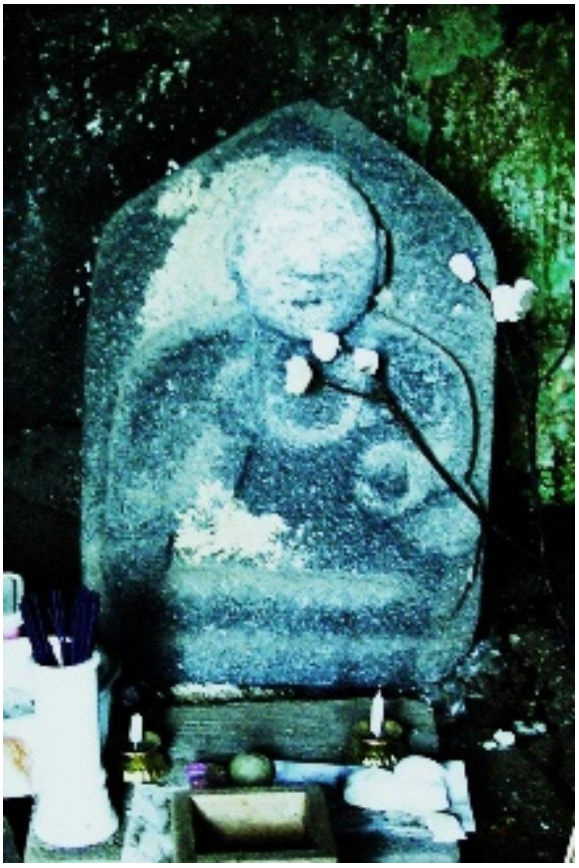
164　中富田の穴薬師様（富田町）

古墳の石室を思わせるような石積みの室の中に薬師如来が安置されており、それゆえ穴薬師様といわれている。舟形光背を負う半肉彫りの薬師如来坐像である。右手は施無畏印（何も恐れることはないよ、と説法を聞く人々の緊張を和らげるポーズ）で左手は薬壺を載せている。

薬師祭りは、九月七・八日に灯籠を竹に吊るし火を灯して祭る。当日、お参りする人は薬師様の顔にうどん粉を塗ってお化粧し線香をあげる祭りで、眼の病にならないよう祈願するということから眼信仰の薬師様として信仰されている。薬師如来の顔に粉を塗るのは各所で見られ、それゆえ「おしろい薬師」と呼ばれている。

穴薬師の入口前に石造の水鉢がある。水鉢本体は口縁部から底部ですぼまり、その下部には猫足状の脚部を備え、一石で造り出すという秀逸な石造物である。鉢の側面に「施主敬白　宝永四（一七〇七）天亥（薬師如来）奉寄進□水鉢霊　安楽　八月八日　星野佐五右門」と刻銘され、穴薬師墓地にある。

＊城南公民館だより「城南」平成30年11月15日発行



165 二十二夜塔（新井町）

基礎に反花が施され、共に八角形の中台の正面に「二十二夜」、右に「文政庚寅年（一八三〇）」、左に「仲冬（十一月）吉日」の刻銘があり、蓮華座の上に如意輪観音の丸彫り像が載る。この年は翌十二月の十日に文政から天保に改元された。従って、この塔の建立は天保の直前である十一月を示す仲冬の刻銘からも明らかである。建立された理由は天変地異（京都に地震が発生した）である。二十二夜塔は新井町集落センターにある。

如意輪観音は条帛をまとい、足を輪王坐に組み、左手は左膝の上に按山手をとる。右立膝に右肘を置き手を頬に当てる。これはいかにしたら衆生の苦しみを取り去り、利益を与えることができるか、と思案している姿である。頭部に阿弥陀如来の化仏を付している。この像は基礎・中台・蓮華座に対し、如意輪観音像は後向きで逆に積まれている。

二十二夜待は、月が上るのを待って祀る、いわゆる月待信仰である。なお、二十日以後の夜の月を「臥待の月」といい、夜の世界を治めた月読尊は月の神とされ、さらに仏教と結びつき習合信仰されるようになった。月待講は安産や子育てのための女人講である。

＊城南公民館だより「城南」平成30年12月15日発行

166

双体道祖神（西大室町）

三角状の自然石の一面を削り、中央を丸く彫り窪め、その中に双体の道祖神が半肉彫りされている。その周囲に飛雲を施し、女神は男神に寄り添い、右手を男神の後ろから右肩に載せを抱き、左手は握り合っている。天孫降臨の際、道案内に出向いた国津神の猨田毘古命は、天津神の邇邇芸命の勧めで、随行していた天宇受売命と結ばれた。この二神が双体道祖神といわれている。

伊邪那美命は、多くの神を産んだが最後に火の神を生んだことで亡くなった。伊邪那岐命は、妻の伊邪那美命に逢いたくて堪らず、黄泉国（死後の世界）を訪れるが屍体を見て恐れ逃げ帰った。黄泉平坂で幽鬼に阻まれたが道反大神が護ってくれた。古来より道の分岐点に邪鬼や悪霊が入ることを防ぐ神を岐神といい、後に道反大神と混合し塞神になった。

奈良時代の文献では「道祖」の文字を「ふなど」と読ませ、平安時代には「道祖神」を「さえのかみ」と読ませている。後にその神が村へ入る悪霊を塞ぎ、旅人の安全を守る道祖神となった。大室城南東の前橋～西久保線の端に明治廿二年八月廿一日に建立された。

＊城南公民館だより「城南」平成31年1月15日発行

167 寒念仏供養塔（上増田町）

供養塔は、基礎石はなく薄い台座があり、その上に竿と蓮華座の上に地蔵菩薩像が積まれている。地蔵菩薩像の頭部は体部に比べ著しく小さく別個体の可能性がある。台座と地蔵像にも規模の差違が見受けられる。なお、体部中央下部分は横に欠けて修復の跡が見られる。明治新政府の「神仏判然令（神仏分離令）」時の被害跡であろうか。竿の中央に「寒念佛供養」、右に「寶暦十三 癸未天（一七六三）」、左に「七月大吉日」の刻銘がある。地蔵菩薩像は、右手に錫杖を持つ立像で、左手は与願印をなし掌に宝珠を載せていたが欠損している。宮原の念仏講の人達によって薬師堂境内に造立された。

寒は、冬至後十五日目に始まり、前半が小寒、後半が大寒で、立春の前日（節分）までをいう。その寒中に行われるのが寒行の念仏である。その内容は夜に三十日間、声高く念仏を唱えながら鉦をたたき仏寺に詣で、または有縁の家や付近の地を巡行する。寒念仏の多くは浄土宗系の僧侶や信徒によって行われた寒修行である。寒中の屋外を念仏を唱えながら一ヵ月行うことは、精神的や身体的にも大変至難なことでその反面、功徳が多いとされていた。民衆が行う寒念仏は室町時代に始まり、江戸時代中期に盛行し供養塔を建立するようになった。

＊城南公民館だより「城南」平成31年2月15日発行

168 八坂宮石祠（小屋原町）

唐破風流造りの正面中央に「天王宮」の社額が付され、「文化九壬申年（一八一三）六月二十八日」の刻銘がある。明治三十九年の「神社合祀令」により稲荷神社境内へ移された石祠である。この石祠の本源は、京都東山の元官幣大社・祇園社で祭神は牛頭天王である。「天王」とは、牛頭天王のことで疫病除けの神である。牛頭天王はインドの祇園精舎（釈迦の僧坊）の守護神で薬師如来の垂迹（仮の姿で現れること）ともいわれ、頭頂に牛頭を載せる姿なので牛頭天王と称されている。

貞観十八年（八七六）藤原基経（右大臣）が、牛頭天王の精舎を造営するため私有地に建立したのが京都の祇園社といわれる。平安時代に疫病や怨霊の退散を祈願し、山鉾を出したのが祇園祭りの始まりである。疫病除けの神として次第に全国へ流布し、現在神社で行われている「茅の輪くぐり」も牛頭天王信仰の疫病除けが発祥である。

明治政府の「神仏判然令（神仏分離）」により、神社および境内から一切の仏教色を排除することになった。そして祭神は「牛頭天王」から「素戔嗚尊」へ、社号の「祇園社」は「八坂神社」と改めさせられた。

＊城南公民館だより「城南」平成31年3月15日発行

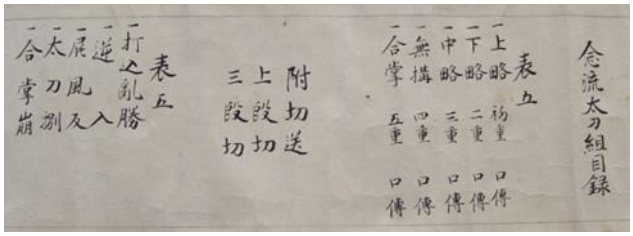
169

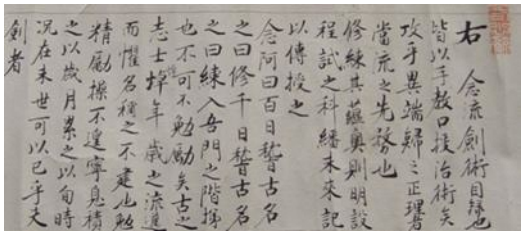
念流「弘武館」①（下増田町）

明治二十一年（一八八八）、北爪源求は下増田村に生まれた。筑井尋常高等小学校を卒業後、十五歳で市場（旧赤堀村）の剣術の名門である本間念流「練武館」の門を叩いた。「練武館」の初代館長は本間仙五郎である。念流は慶長年間（一五九六～一六一五）、上州は馬庭（現高崎市吉井町）の郷士樋口又七郎定次が、自ら編み出した剣法を「馬庭念流」として創始した。

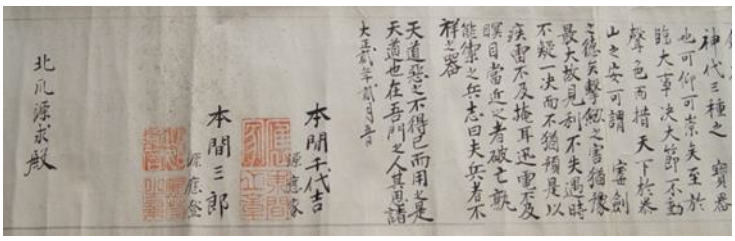
本間仙五郎は、十三歳の時に父を亡くし極貧の中、家運再興のため一心不乱に働き、後に県下に知られる豪農となった。また父が自然流の遣い手であったことから、自らも古武道荒木流の大山志磨之助に入門した。青年の頃、赤城山の滝沢不動に籠り激しい修行を重ね、師から「赤城の小天狗」と称され、やがて免許を授けられた。その後、知遇を得て「馬庭念流」十四世の樋口定暠に入門を果たした。弛むことなく研鑽に励み遂に永代免許を授かった。源求が「練武館」へ入門した当時は四代目の本間千代吉館長で、源求は厳しい修行に励んだ。大正二年二月五日付で「念流太刀組目録」を伝授された。

＊城南公民館だより「城南」平成31年4月15日発行


念流太刀組目録
表五
一上略　初重　口傳
一下略　二重　口傳
一中略　三重　口傳
一無構　四重　口傳
一合掌　五重　口傳
附切送
上段切
三段切
表五
一打之乱勝
一逆入
一展風及
一太刀測
一合掌崩


右　念流剣術目録
皆以手数口授治術矣
攻手異端歸之正理者
當流之先務也
修練其極奥則明設
程試之科繕末來記
以傳授之
念阿曰百日誓古名
之曰修千日誓古名
之曰練入岳門之階梯
也不可不勉勵矣古之
志士捽年歳之流通
而懼名種之不建也勉
精勵操不違寧見積
之以歳月累之以旬時
況在末世可以已乎夫
剣者

「念流太刀組目録伝授書」


神代三種之寶器
也可仰可崇矣至於
能大事決大節不動
聲色而措天下於泰
山之安可謂　宝剣
之德矣聲絶之害猶豫
最大故見利不失遇時
不疑一決而不猶預是以
疾雷不及掩耳迅電反及
瞑目當近之者破亡就
能御之兵志士夫兵者不
祥之器
天道惡之不得已而用之是
天道也在吾門之人其可謂
大喜哉年號月者
本間千代吉
本間三郎
北爪源求殿

170 念流「弘武館」②（下増田町）

馬庭念流を創始した樋口又七郎定次の祖は、木曽次郎源義仲の四天王樋口次郎兼光で、妹は義仲の愛妾（あいしょう）巴御前である。馬庭念流は、攻守一体で心身鍛錬し、自然に勝ちを知り得る、それは人生の道に相通ずることを理念とする剣法である。市場（旧赤堀村）の本間仙五郎は、明和三年（一七六六）に入門を許され、馬庭まで約三十キロの道程を徒歩で通い、厳しい修行に励み馬庭念流きっての剣豪となった。

文政五年（一八二二）、「伊香保神社掲額」騒動が勃発（ぼっぱつ）した。陸奥（むつの）国（くに）（宮城県）に生まれた千葉周作は、松戸（千葉県）の中西派一刀流浅利又七郎道場へ入門し、その筋の良さを見込まれ婿養子に入った。しかし、剣法の思考の相違から師と袂（たもと）を分かち浅利道場を去った。そのため江戸剣法界に居られず、東海や中部から関東へ武者修行するなか北辰一刀流を創始した。しばらく高崎の小泉源十郎道場で指南するなか、門弟から北辰一刀流の奉額を伊香保神社へという気運が高まった。それが馬庭念流一門を刺激し、本間千五郎（二代目）一門もその情報に一早く伊香保へ向かい、馬庭念流一門は総勢二六三名が集結した。この状況に伊香保の顔役木暮武太夫と岩鼻代官が動いて双方の決闘は寸前で回避されることになった。

＊城南公民館だより「城南」令和元年5月15日発行

掲額騒動になった伊香保神社

171 念流「弘武館」③（下増田町）

大正二年（一九一三）、北爪源求はさらに剣の奥儀を極めるべく上京し、他流の神道無念流「有信館」の中山博道範士に師事した。神道無念流は下野国（栃木県）下都賀郡壬生の福井嘉平が宝暦年間（一七五一～一七六四）に創始した流派で、明治に至り中山博道に受け継がれていた。

源求は後に郷土（旧下川淵村）の持田盛二範士十段に師事する機会を得た。持田範士は、古武道の法神流や北辰一刀流を学んだ剣士である。法神流は奥利根薗原村の楳木法神が創始し、文政三年（一八二〇）に二代目が前橋へ進出していた。持田範士は、昭和四年（一九二九）の天覧試合で優勝し「昭和の剣聖」と謳われ、警視庁と皇宮警察の剣道師範を務めた。昭和三九年の東京オリンピックで、斎村五郎と共に「剣道の型」の演武を披露している。

大正十五年（一九二六）、源求は邸内に念流「弘武館」を開設した。本間念流の精神を受け継ぎ、剣道を通して地域の青少年の健全育成に傾注した。その後、昭和十八年（一九四三）、本間千代吉館長より念流の免許皆伝を授けられた。

＊城南公民館だより「城南」令和元年 6月15日発行

北爪源求館長

持田盛二範士揮毫による「弘武館 北爪館主 邦良」の扁額

172 念流「弘武館」④（下増田町）

北爪源求は、歳を経ても剣道に対する精神は一向に衰えることなく益々旺盛であった。そのような館長を慕い近郷近在からは「弘武館」の門を叩く若者は跡を絶たず、隆盛期は門下生六百余名を数えるほどであった。館主源求は錬士五段になり、喜寿を迎えるに至り未だ矍鑠として門弟の指導に励んでいた。その姿に「弘武館」の門弟や多くの関係者により、直向きで崇高な師のため、昭和四十年に大きな「頌徳碑」が邸内に建立された。しかし、その四年後に源求先生は惜しまれつつ旅立ち、剣道一筋の生涯は享年八二であった。

頌徳碑の扁額は、当時群馬県剣道連盟会長の藤枝泉介の筆による。藤枝泉介は、栃木県の船田家の三兄弟として著名な存在で、その後は藤枝家の養子になった。長兄の船田中は衆議院議長、二男の享二はローマ法学者として活躍した。藤枝泉介は前橋市を拠点に群馬県一区から衆議院議員となり、運輸大臣・自治大臣や副議長を歴任した。頌徳碑の裏面に、源求先生の足跡を群馬県剣道連盟事務局長の教士七段宮下喜平次が撰文、教士七段舘野治郎が謹書している。

＊城南公民館だより「城南」令和元年7月15日発行

上位の扁額は「念流免許皆伝」、中央には「北爪源求先生頌徳碑」と記されている。

173　麻疹降霊塔と禁葷酒塔（東大室町）

麻疹降霊塔は、中央に「麻疹降霊場」と刻銘されている。麻疹とは天然痘のことでまたは疱瘡ともいう。天然痘はウイルスにより気道粘膜から感染し、高熱を発し悪寒・頭痛・腰痛を伴い、解熱後は主として顔面に発疹を生じ、あとに痘痕を残す。感染性が強く死亡率も高い。しかし、種痘を人体に接種し、天然痘に対する免疫性を得させ、感染を予防することができるようになったが、それ以前は大変恐れられた病気であった。最善寺の東の堀に架かる橋をくぐると種橙の経過がよいといわれ、橋の傍らにこの塔は建立されている。この他に以前は、麻でウツギの棚を作り、赤い紙で幣束を立て、路傍の桑の枝に掛けて置く、という疱瘡棚送りをしていた。

禁葷酒塔は、基壇・塔身を合わせると一三五㌢を測り、この塔の意味は「葷と酒を禁ず」という意味である。厳しい仏道修行をするには、自らを律し戒めないと煩悩の世界から脱し得ず修行もおぼつかない。それには先ず身近な食生活から慎しまなければならないという。葷とはニラ・ニンニク・ネギ・肉類などで、そのうえ飲酒も避けなければならない。つまり、修行の妨げになることすべてを慎み禁ずということである。

＊城南公民館だより「城南」令和元年８月15日発行

禁葷酒塔

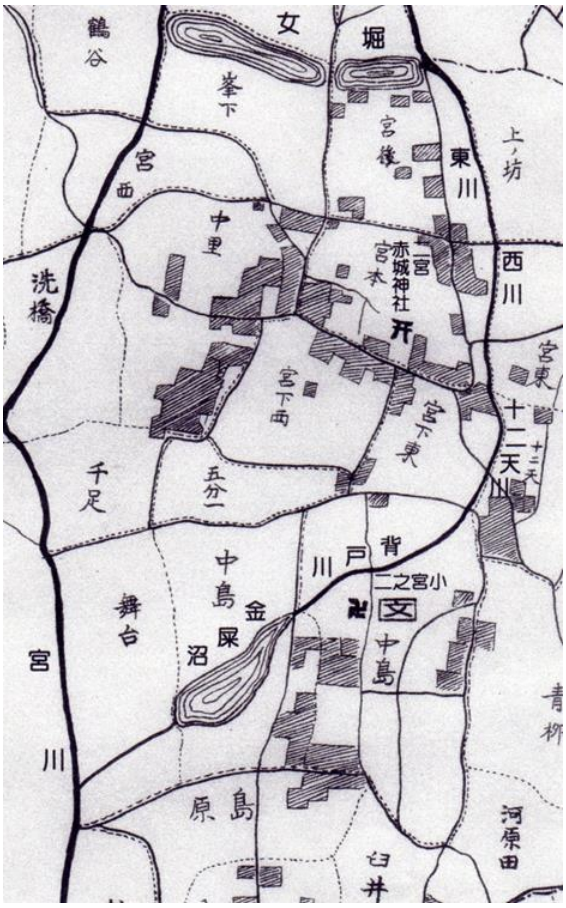
麻疹降霊塔

174　多名な小川（二之宮町）

女堀東沼の東側を荒子町から南流する小川は公的な名称がない。宮後地区（二宮赤城神社北の集落）や宮本地区（二宮赤城神社鎮座地）の左岸側では「東川」と言う。左岸側の宮東地区（二宮赤城神社東の集落）は集落の西を流れているので「西川」と言う。この付近は神社の鎮座地を中心に小字名が付けられている。小川はさらに南流し小字十二天に至ると「十二天川」と呼ばれる。それから二之宮小学校の北辺でほぼ直角状に西に折れ、中島地区では集落の北辺を流れていることから「背戸川」と呼ばれている。二之宮町地内で四つの名で呼ばれる小川の水はやがて金屎沼に貯留され宮川へ落水する。公的な名称がない小川は、地域によって様々な名称で呼ばれる珍しい例である。

土地改良事業により金屎沼は消滅したが、この沼には大蛇にちなむ伝説がある。中島の側にある天之宮に住みついた大蛇が沼の水を飲んでしまうので、田植えの頃になるといつも沼の水が涸れてしまう。困った農民は大蛇が嫌がるという金屎を次々と沼に投げ込んだ。その水を飲んだ大蛇は悶え苦しみ、這這の体で赤城山の大沼へ逃げ帰ったという。それから沼の水は涸れることは無くなったという。

＊城南公民館だより「城南」令和元年 9月15日発行

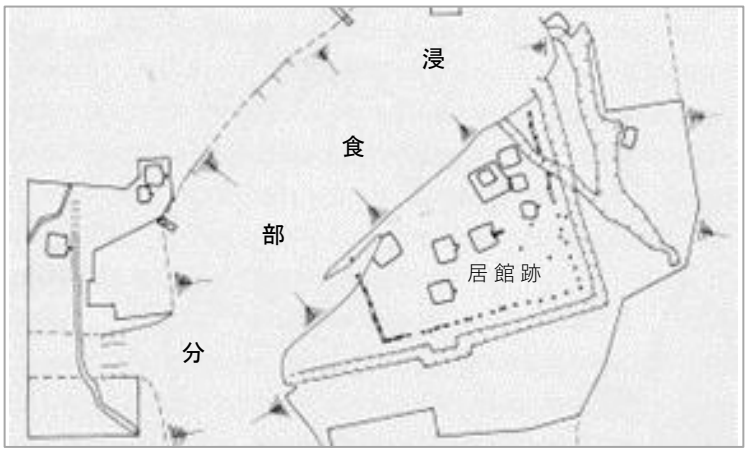


175 荒砥荒子遺跡（荒子町）

昭和五十七年度の荒砥北部圃場整備事業に伴い、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団により調査され、この遺跡の台地部分から堀に囲まれた状態の居館跡などが検出された。遺跡はJA荒砥支所から南へ約二五〇㍍、（主）伊勢崎・大胡線の東側地点に存在していた。この遺跡から幅約二・二㍍、深さ二十～五十㌢の方形に掘られた堀跡が検出された。堀からは高坏（たかつき）など古墳時代の多くの遺物が出土した。

方形の遺構は流水の浸食によって北西部分を失われている。東西の残存部分は五十九㍍あり、中央部には一・八×五㍍の張り出し部分がある。堀の内側に約二㍍間隔で柱穴列も見つかっている。この遺構の構造は外敵からの防御を目的に備えられたもので、その性格上から豪族の居館跡と推定され、この地域の古代史を考察する上で重要な遺跡である。居館跡の年代は五世紀後半と考えられ、ここから南西へ約二・四キロにある今井神社古墳とほぼ同じ年代の構築であると考察されている。なお、居館跡の部分からはその遺構より後の平安時代の竪穴住居跡が九軒ほど検出されている。

＊城南公民館だより「城南」令和元年10月15日発行



浸食により古代の居館跡の左斜め半部は失われている。内側には平安時代の竪穴住居跡。

176　高尾山供養塔（新井町）

塔の中央に「高尾山」、右側に「明治十四年十月吉日」、左側下に「栗原忠榮」の刻銘があり、赤城神社の参道手前の左側にある。高尾山は東京都八王子市高尾町にあり、標高六〇〇㍍で修法と信仰の霊山として崇められていた。山頂直下にある高尾山薬王院有喜寺は、成田山新勝寺および川崎大師平間寺と共に関東の真言宗三山の一つとして知られている。高尾山は奈良時代の僧行基により開山されたといい、永和年間（一三七五～七九）に俊海が中興・開山した。俊海は不動明王を勧請して護摩供秘法を修し、飯縄大権現を感得（幽玄な道理などを悟り知る）したと伝える。

その後、高尾山は小田原の後北条氏の庇護を受けた。後北条氏の三代・氏康は天文十五年（一五四六）武蔵河越で山内・扇谷の両上杉氏を破り、のち上杉謙信と戦って撃退し全盛期を築いた。天文年間（一五三二～一五五五）には富士浅間社を勧請している。

高尾山は他の山に比べ山自体があまり険しくないことから「火と水の修行」が採り入れられるようになった。また、富士講の盛行によって富士登山道の中路にあたることから遥拝する名所になり、高尾山は富士山の前山として重く信仰を受けるようになった。

＊城南公民館だより「城南」令和元年 11月 15日発行

177　梵字庚申塔（上増田町）

正面に「 」と刻まれている。「 」は庚申の主尊青面金剛、その下の三文字「」は庚申塔を梵字で表している。梵字の庚申塔はこの地域では初見で東組にある。右側に「宝暦十三癸天（一七六三）」、左側に「十一月大吉」の刻銘がある。

庚申は中国の道教から起こり暦で六十日目に巡ってくる干支の庚申の夜、人が眠っている間に三尸という虫が身体から抜け出し、帝釈天にその人のふだんの生活しているなかでの悪事を報告するという。するとその罪の重さによって寿命が縮められてしまうという。そこで、三尸が体内から抜け出さないよう朝まで眠らずに庚申の主尊青面金剛の掛け軸を掲げ儀礼を行う。従って、その夜は眠らず過ごすのを「庚申待ち」といい、三尸を調伏するために庚申塔が辻に建てられ健康長寿を願った。

庚申信仰は平安時代初めころに渡来し宮廷貴族の間で行われ、やがて武士に広まり仏教に影響を受け江戸時代には修験者により信徒集団が庚申講として結成された。江戸後期に復古神道が盛んに唱えられ、その影響により主尊は猿田彦命に変えられた石塔も建立されるようになる。

＊城南公民館だより「城南」令和元年12月15日発行

178 今宮八幡宮（下増田町）

八幡宮の祭神は誉田別命（ほむたわけのみこと）で、第十四代仲哀天皇の第四皇子として生まれ、母は神功皇后である。後に誉田別命は第十五代天皇として即位し後に応神天皇と呼称された。増田村は寛文九年（一六六九）から元禄十四年（一七〇一）の間に分村され、上増田村と下増田村になった。増田村の鎮守は赤城信仰で祭神は大己貴命（おおなむちのみこと）とする近戸神社である。分村後、上増田村はそのまま近戸神社を鎮守としたが、下増田村はこの時点で新たな鎮守を勧請（かんじょう）（神を迎えて祀る）することになる。

現在の今宮八幡宮の境内に「奉造立今宮大明神」、「寛永元甲子（きのえね）（一六二四）歳」、造立者「深沢采女正繁利（うねめのしょう）　同　重廣　同　清次　同　正吉　同　成家」の石祠があり、この石祠が下増田村の鎮守になった可能性がある。今宮とは、新たに迎えて祀った神社を意味する。なお、須永地区は明治三九年の「神社合祀令」が発せられるまで集落の神として今宮八幡を祀っていた。八幡宮の本源は、豊前国（ぶぜんのくに）宇佐郡（大分県）の宇佐八幡宮で、平安時代に京都へ勧請され石清水（いわしみず）八幡宮として祀られた。源義家はここで元服したので八幡太郎を名乗り、武勇にすぐれ陸奥守（むつのかみ）・鎮守府将軍となり東北地方を平定した。源氏一門やその一統は八幡神を守護神とし、後裔（こうえい）の源頼朝は鎌倉へ幕府を開くと八幡宮を勧請している。

＊城南公民館だより「城南」令和２年１月15日発行

179 阿弥陀三尊像（今井町）

石堂のなか中央に阿弥陀如来、右に脇侍として観世音菩薩、左に勢至菩薩が舟型光背一石に薄肉彫りされている。阿弥陀如来は、穏やかな表情で上品上生印を結び、脇侍は共に合掌している。石堂とともにすべて安山岩製である。建立は「貞享五年辰（一六八八）四月五日」、「施主は福田弥五右衛門」と刻まれ今井神社の参道左脇にある。一つの光背に阿弥陀如来を、左右に脇侍を備えるのは一光三尊形式という。

阿弥陀如来は無量寿如来ともいい、それは寿命に限りなく、光明は国土を照らし、妨げられることはないとされている。四十八の誓願をたてて修行しその結果、阿弥陀如来となり西方浄土に住むことになった。阿弥陀如来を信じ念仏を行うものは、すべて必ず極楽往生させるといい、訪れた者に説法し導くと云う。

奈良時代後半に聖武天皇や光明皇后を中心に阿弥陀信仰が広まる。その後、平安時代中期に法然による浄土教が開かれ、鎌倉時代以降はその教えが安易なため信仰は広まった。戦国時代になると戦場に赴く武士のほとんどは浄土宗に帰依するようになる。

＊城南公民館だより「城南」令和２年２月15日発行

180　御佛は大地に…（東大室町）

「御佛は大地におわす八重櫻」と詠まれている。仏様は遠い遠いところではなく、春には花を咲かせる大地のような身近なところにもいるんだよ、と教え諭（さと）しているような俳句である。書体は何らとらわれることなく、大らかで自由に柔らかくゆったりとした文字である。見れば見るほど飽くことなく、いつまでもじっと見入ってしまう不思議な魅力を放つ松野自得翁の書体である。

自得翁は昭和十九年に曹洞宗赤城山最善寺十九世の住職となる。俳句は高浜虚子に就（つ）いて学び、山水画は河合玉堂に師事した。昭和四年、俳誌「さいかち」創刊と共に選者となり、昭和十三年にはその主幹となる。住職の務めの傍らもっぱら俳諧に勤（いそ）しんだ。自得翁は純粋で自然に心優しく、何とも言えないような暖かさあふれる句を詠み、まるで江戸時代後期の良寛和尚の句を彷彿するようである。

自得翁の句は広く多くの人に称賛され、句碑は全国各地に五四基建立されている。そのうち県内に十五基、前橋市内に十二基、荒砥地区に七基ある。それらの俳諧における功績により県文化賞・県文化功労章、後に勲五等瑞宝章を受けている。

＊城南公民館だより「城南」令和２年３月15日発行

181

岩切薬師坐像（小屋原町）

薬師如来の頭部には肉髻（頭頂の塊）が認められるが、摩滅が進行し螺髪（螺旋状の頭髪）や面立ちなど表情は不明瞭である。衲衣は通肩（両肩を衣で覆う）しており、足は結跏趺坐（蓮華座）で、手は法界定印を結び薬壺を載せている。両手と薬壺の部分は欠落が見られる。この石像は岩切薬師堂の境内にある。泉蔵寺第七世の公稟和尚は、享保十九年（一七三四）大乗妙典一千部を読誦した。公稟はそれを記念して供養塔を建立した。その碑文にこの薬師像を「当里の諺に曰く、弘法大師の岩切薬師なり」と刻銘している。

弘法大師は、真言宗の開祖で空海といい宝亀五年（七七四）讃岐（香川県）に生まれ仏門に入った。延暦二十三年（八〇四）唐へ渡り恵果に仏法を学び二年後に帰朝した。京都の東寺や高野山金剛峯寺を経営し、また宮中真言院の設営に関わり真言密教を国家仏教として定着させた平安時代初期の僧である。この小屋原町の薬師石像は南北朝期（一三三六～一三九一）以降のものと推定され、弘法大師とはおよそ五百年の隔たりがある。見事な石仏ゆえにそのような伝承がなされたのであろう。

＊城南公民館だより「城南」令和２年４月15日発行

182 原組の出羽三山塔（飯土井町）

塔の上位に胎蔵界大日如来を表す梵字「ウン」、その下に右から「月山」、「湯殿山敬禮」、「羽黒山」、裏面に「天保四年（一八三三）八月吉日」、「石綿左右エ門、関根喜右エ門、関根正右エ門、関根八兵、　関根□吉、原島半吉、根岸□□、村中」の刻銘があり、出羽三山講の人達によって建立された。

出羽三山は出羽国（山形県）にある月山・羽黒山・湯殿山の三山で、古来より修験道の聖地として知られている。用明天皇の死後、崇峻天皇は蘇我馬子に助けられて即位したが、それにより蘇我氏の横暴が目立ち遠ざけるようになった。それを察知した蘇我馬子は、五九二年に崇峻天皇を暗殺した。危機を察知した蜂子皇子は羽黒山へ逃れ開山したと伝わっている。平安時代中期に修験者により出羽三山信仰が成立し、鎌倉時代になると羽黒修験が強大となり室町時代には湯殿山修験が盛んとなった。江戸時代には仏教色が強まり神仏混淆の修験の本拠地となり、後期には民間信仰が主流で一般信者の三山講集団が結成された。湯殿山は五穀豊穣のご利益があるとされたが、明治の神仏分離で仏教色は一掃され、主導権は羽黒山に移り、中央に「羽黒山」、両側に「月山・湯殿山」刻まれるようになった。

＊城南公民館だより「城南」令和２年５月15日発行

183 神代七世石祠（筑井町）

石祠の室部右側面に「日本七之尊」、左面に「安政丙辰季齊藤平菴建立」と刻銘されている。日本七之尊とは神代に現れた七代の神のことで、この石祠は安政三年（一八五六）の建立で近戸神社の境内にある。以前は筑井村のいずれかの集落で祀っていたが、明治三九年の「神社合祀令」により鎮守の境内へ移されたものである。天地開闢により天と地が分かれまだすべてが混沌としていた時、天御中主神・高御産巣日神・神産巣日神・宇麻志阿斯詞備比古遲神・天之常立神の五柱が現れては消えた。

その後、七代の神々が次々と現れた。①国常立神、②豊雲野神（浮脂の如く漂う地の神）、③宇比地邇神と須比地邇神（泥土の神）、④角杙神・活杙神（泥土に芽が出る力を持つ神）、⑤意富斗能地神・大斗乃弁神（成長した大地の神）、⑥淤母陀琉神・阿夜訶志古泥神（大地の表面を完成した神）、⑦伊邪那岐神・伊邪那美神は二神は島や国や万物を生み、伊邪那美神は最後に火の神を生んだことで黄泉国（死の国）へ逝く。逢いに訪れた伊邪那岐神は身が穢、筑紫の日向（宮崎県）の阿波岐原で左目を禊ぎ祓うと天照大御神（高天原）、右目から月読命（夜）、鼻からは須佐之男命（海）の三貴子が生まれた。

＊城南公民館だより「城南」令和２年６月15日発行

184　安楽祈願塔（二之宮町）

竿の上には火袋（灯籠の火を灯す）と見られるU字状の窪みがある。その上に仏式石塔の龕部（仏像などを刻む）に相応するものがあり、四面には三躰ずつ十二支が左廻りに半肉彫りされている。それは月々の経過と四面は春夏秋冬の一年を現している。塔身に笠を載せ、その上に露盤と請花と宝珠が施されている。なお請花には蓮華が施され、また宝珠などの造形は仏式の石塔状である。竿の右側に「元禄十三年庚辰（一七〇〇）」、中央に「奉造立御寶前二世安楽所」、左側に「十一月吉日」、下部に「願主　狩野長衛門」の刻銘があり神社境内にある。

「御宝前」とは赤城大名神（祭神）の御前、「二世」は現世と来世のことで、現世とは生まれてから死ぬまでの人生、来世は寿命がつきて死んだ後での永遠の時をいう。そして夫婦とは二世を過ごすという。なお「安楽所」とは苦もなく楽々と過ごせるよう叶えてくれる所である。つまり、「赤城大明神の御前に二世の安楽を祈願し石塔を造立奉る」というものである。仏事の逆修塔と同様のものと考えられ、生前に死後の菩提を祈願することである。ちなみに親子のつながりは現世で一世、夫婦の因縁は現世と来世の二世、主従の因縁は前世と現世と来世で三世という。前世とは現世に生まれ出る前の世である

＊城南公民館だより「城南」令和2年7月15日発行

185 尺神石祠（富田町）

石祠の石段の脇押さえに「寛政六甲寅（一七九四）九月吉日」と刻銘されている。伝承によれば、厩橋藩による検地が行われた際に祀ったという伝承がある。このような石祠は尺神、社宮司・石神・赤口神・シャゴジ・ミシャグチ・オシャブキなど様々な名称がある。尺神とは田畑の測量が済みその用具を神として祀ったとされる。後にこの石祠は稲荷神として信仰され、なお百日咳の神とも習合され祀られている。

寛永三年（一六二六）厩橋藩二代藩主で幕府老中の酒井忠世の時に検地が行われた記録がある。結果は田畑あわせて三九町四反九畝二一歩（約三九・一七㌶）であった。大老となった四代忠清と老中主座の五代忠挙の時、新田開発により田畑の追加検地があった。寛延二年（一七四九）九代忠恭が姫路へ転封となり、入れ替えに松平大和守朝短が入封したが、利根川の大水による浸食で本丸が崩落したため川越へ移城した。この尺神石祠は松平領になった寛延二年（一七四九）から四五年後の寛政六年（一七九四）に建立されている。尺神石祠は塩沢健一氏の宅地内にあり、子供のころ近所のお年寄りが歯の神様といって供え物をしていったことを記憶していると語っていた。現在は稲荷祭りの時に祀っているという。

＊城南公民館だより「城南」令和２年８月15日発行

186 猨田毘古大神塔（西大室町）

中央に「猨田毘古大神」、裏面に「萬延紀元庚申（一八六〇）十一月之吉日」と刻銘され神社境内にある。猨田毘古大神（猿田彦命）は鼻の長さ七咫（一咫は親指と中指を開いた長さ）、背の高さは七尺余（約二一〇余）口赤くして光あり、眼は八咫（約二二余）に及び大鏡の如く輝かせていたという。邇邇芸命の天孫降臨の際、それを先導するため待ち受けていた国津神・猨田毘古命は、それに随行していた天宇受売命と出会い邇邇芸命の薦めにより婚姻した。後に天宇受売命は芸能の神として信仰された。

江戸時代中期頃から、儒教や仏教渡来以前の日本古来の文化などを確立するための国学思想が起こる。それは荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤らによって確立された。国家神道のもと仏教を排除するというもので、幕末や明治維新に大きな影響を与えた。それにより仏教系の主尊を排除し、神道系の神を主尊として置き換えるということがなされた。この塔は仏教系の庚申信仰の主尊・青面金剛を排除し、それに替え神道系の猨田毘古命を主尊にした塔である。それはこの碑の造立が萬延元年（一八六〇）庚申年であることからも明らかである。

＊城南公民館だより「城南」令和２年９月15日発行

187 牛頭天王石祠（泉沢町）

石祠の屋根は唐破風造で、その正面には額状に加工された社号が「天王宮」と刻字されている。室部に「文化十四年（一八一七）丁歳六月廿日座之」、基壇の右側面に「願主　青木谷八」と刻字され西泉沢町の丸山にある。「天王宮」とは、インドの神で牛頭天王のことである。総本社は京都東山の祇園社（現八坂神社）で、祭神は牛頭天王（現素戔嗚尊）で、祇園天王や天王様とも呼ばれていた。牛頭天王とは、インドの祇園精舎の守護神で薬師如来の垂迹ともいわれ頭頂に牛頭を乗せている。

祇園精舎とは、須達長者が釈迦やその弟子のために建てた僧坊のことで、釈迦の説法の多くはここでなされた。なお、我が国での祇園社の創建は七世紀末で、その後は延暦寺の支配を受けていた。祇園祭は平安時代に疫病退散を祈願し山鉾と神輿を出したのが始まりとされている。平安京は様々な怨霊による祟りがあり、それを和らげるための呪術的な行事で、厄除け神として信仰を深め次第に全国へ流布した。明治政府の「神仏判然令」により仏教排除がなされ、社名は祇園社から八坂神社、祭神は牛頭天王から日本神話の素戔嗚尊へと改められた。

＊城南公民館だより「城南」令和２年10月15日発行

188 金毘羅宮（下大屋町）

金毘羅とは古代インドの文語であるサンスクリット語のクンビーラの漢訳で、インドのガンジス河に棲息する鰐を神格化したものである。なお鰐は蛇体ともされ、水神としても信仰されている。金毘羅は薬師如来十二神将の一つで仏法の守護神・宮毘羅大将のことである。鰐神は龍神あるいは海神として、海難祈願や雨乞いなど水に縁ある善神とされ、我が国に渡来して金毘羅大権現として祀られたものであり産泰神社境内にある。

我が国で金毘羅は讃岐国琴平（香川県）にある象頭山の神と神仏習合し、金毘羅大権現と称され祀られているものが本源である。後に全国各地へ信仰が広がり祀られた。なお、江戸時代初めから航海者や漁民、農民の尊崇を受けて各地に金毘羅講が結成され金毘羅参りが盛んに行われた。金毘羅神は、明治政府の「神仏判然令」により神仏は分離・排除され、社号の「金毘羅宮」は「金刀比羅宮」、祭神の仏教神「金毘羅大権現」は日本神話の「大物主神」に改称された。

＊城南公民館だより「城南」令和2年11月15日発行

189

青面金剛塔（荒子町）

舟型光背の上位中央に青面金剛を現わす種子が陽刻され、その下の左右に日・月が刻まれている。青面金剛は半肉彫りされ憤怒の形相で牙を剥き、頭髪は火炎のように逆立っている。六臂（六つの腕）のうち左手の上位は弓、下位の手には宝剣、右手の上位は矢を握り、下位は鉤を持ち、胸前の両手は合掌印を結ぶ。右に「奉造立青面金剛供養塔」、左に「享保十一丙午年（一七二六）称月吉日」の刻銘があり薬師堂境内にある。称月吉日は、この供養塔を称え良き月日に建立したという意であろう。

青面金剛の姿は、いかなる病魔や病鬼も払い除くとされている。像の下位の左右には鶏が薄肉彫りされている。庚申信仰は十干十二支の庚申の日に行われ、「庚申講」は夕方から翌日の朝まで行うもので、鶏が夜明けを告げるまでということを象徴している。台石に三猿が半肉彫りされており、講中のうちは「見ず・聞かず・言わず」のように言動を慎むことを表している。青面金剛の特徴である青色顔料が部分的に残存している。青面金剛は、仏教の帝釈天に従う神で庚申信仰の主尊として江戸時代中期頃になると盛んに青面金剛像が祀られ造立されるようになる。

＊城南公民館だより「城南」令和２年12月15日発行

190 起溝碑（荒口町）

荒口には北原沼の南へ約二〇〇メートル地点にかつて諏訪沼が存在していた。昭和五十六年から実施された荒砥北部圃場整備事業により諏訪沼は埋め立てられた。その沼の畔に建立されていた「起溝碑」は現在赤城神社境内へ移転されている。

起溝碑には「當区は水脈極めて利あらず 先人も之を憂え 該取入口東方三十八米の地位より林間を縫ふて水路を設け 常に飲料防火の通水に備う 然りと雖 迂曲する水行意の如くならず 渇水火災等の引水苦に鑑み 茲に新溝を開きて区民の安住を永久に図らんとし 昭和二十七年三月発議 警鐘塔側より南下する中央道路の擴張に伴ひ 道路に水路を新設し水口を諏訪沼口と定む 但し難工事により 豫め之が工事資金の確保を先決とし 擬義の上小麦の供出を決行して之に備ふ 二十九年八月一日起工 荒蕪地を開発しコンクリートの溝長九十米 継で掘割の深さ四米 長さ八十八米 之に口経二十糎の土管を敷設し取入口壁より三十五米六八の地位にマンホールを設け 以て埋没し耕鋤（耕土を起こす）に便ならしむ 仝年十一月二十四日に完工 翌二十五日大安の祥月を卜し（占い）宿望の水滑らかに通す 茲に区民の勤労を謝し概要を刻して後見に貽す 昭和二十九年十二月建 起稿 阿部米太郎 書者 藤口實一」と刻銘されている。

＊城南公民館だより「城南」令和3年1月15日発行

191　今井神社（今井町）

神社の北側には古道の東街道が東西に走り、参道の石段の手前には、赤城神社の祭神である大囡主神（大穴牟遅神）の石塔がある。今井神社は荒砥川左岸側に存在する前方後円墳の後円部上に社殿が祀られている。明治四十一年（一九〇八）までは、村の鎮守として今井沼の北西約二五〇㍍の字三木堂に「村社・赤城神社（大囡主神）」を祀っていた。東西二十七間（約四十九㍍）、南北二十九間三尺（約五十三・六㍍）、面積二反六畝二九歩（約二十六㌃）の境内を有していた。

明治三十九年（一九〇六）、「神社合祀令」が発せられ全国的に各町村は各集落に点在している小社を強制的に鎮守へ合祀させられた。従来、集落の人々は町村の鎮守とは別に集落ごとに各々信仰する神を祀り祭礼を行ってきた。それが禁止されたことにより全国各所で騒乱が勃発した。この「合祀令」の背景には国家体制の強化を謀るため、国は行政区域と氏子区域を合致させる、という意図があった。今井地内の神社を現在地へ移転した際に、社号を村社「赤城神社（大囡主神）」から、無格社の「菅原社（菅原道真公）」に替え「今井神社」と改称した。

＊城南公民館だより「城南」令和３年２月15日発行

192

埴輪春……（東大室町）

「埴輪春　大室は神の　住まいし地」と詠まれ、赤城産の安山岩に刻まれている。大室には前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳の三基は百㍍級の巨大な前方後円墳と、三十八㍍の小二子古墳などが存在しており国指定史跡として存在している。築造は六世紀前期から末期と考察されており、その頃この周辺一帯を治めていた豪族がこの前方後円墳に埋葬されていたものと考察されている。なお、ここから東へ約四百㍍地点の桂川右岸には豪族の居館跡と推定されている梅木遺跡の存在が発掘調査によって確認されている。

この地にはまるで神のような人が住んでいたのであろう、と最善寺の松野自得住職は発想し詠んだのであろう。大室小学校は、明治八年三月に荒口小学校から最善寺を仮校舎として開校し、翌年には現在地へ大室小学校が竣工した。大室の人々は自得住職の偉大な業績と、人格を称えてそれを永く後世に伝え、子弟教育の一助にと願い句碑造立が計画された。昭和四十七年三月十二日に母校である大室小学校に学制百年を記念し造立された。

＊城南公民館だより「城南」令和3年3月15日発行

193　道林の輪廻塔（飯土井町）

基礎・竿・笠が積まれているが、竿の上の中台と火袋、および笠の上の相輪部は欠損している。竿の上位に縦二十四センチ、横六・三センチの長方形の輪廻車孔が設けられている。そこに納まるべき輪廻車（石車）は存在しない。塔身の右側に「延徳二年（一四九〇）庚戌十一月十六日」、左側に「施主　赤石道林禅定門　敬白」と刻銘されている。禅定門とは達磨大師が開いた禅宗に入った男子のことである。公民館より西へ約二〇〇メートル余りで、江竜川の左岸側にある。赤石一族や衆生が極楽浄土に安住できるよう願って造立したものであろう。

輪廻幢とは、車孔（空洞）に輪廻車を納め軸で止めて回しながら念仏を唱える。すると衆生が三界（欲界・色界・無色界）六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）に迷い苦しみを重ねることなく、極楽浄土へ行けるという。悪業輪廻（三界六道に迷いの生死を重ねてとどまる）を断ち切って速やかに極楽浄土に安住できるように祈願するもので、関東地区でも圧倒的に群馬に多く存在している。応仁の乱の後を受け、世はまさに戦国時代となり庶民は常に戦さの恐怖に脅え生活は窮乏していた。赤石左衛門尉は文明年間（一四六九～一四八七）の頃、旧宮城村鼻毛石から飯土井へ移り赤石城を築き、大永年間（一五二一～一五二八）頃に伊勢崎へ本拠を移したという。

＊城南公民館だより「城南」令和３年４月１日発行

194 安波嶋宮石祠（小屋原町）

屋根は流れ造りで室部の加工は施されておらず、長方形の面に「安波嶋宮」の刻銘があり、神社境内にある。この「安波嶋宮」は「淡島宮」と同様の信仰であり、本源の社は和歌山市加太町の加太神社で祭神は少彦名命である。少彦名命は、医薬・禁厭（まじない）法を行ったという。淡島明神は、婦人病・安産の神として信仰されている。

淡島の「淡」の語源は「海輪」で、いわゆる海神の象徴とされている。この海神は元来女神であることから、「アワ」は女陰の意ともされ、ちなみに巻貝の「鮑」の「ビ」は女陰を指している。従って、淡島の淡、阿波、粟など、「アワ」の語がつくものはいずれも生殖、生産、性器として解釈がなされ、女性と密接な関係を有することになる。

祈願する女性は自分の髪の毛や櫛などをあげ、また形代（紙の人形）をつくって病のもとをこれに移して治るよう願った。これが雛人形の始まりともいわれ、淡島神社は雛堂に奉納された多くの雛人形を船に乗せて海に流す神事が行われている。医療が発達していない時代、婦人病の神として特に婦人の信仰が篤く、江戸時代中期ごろから大変広まった。

＊城南公民館だより「城南」令和３年５月１日発行

195 大塚田の不動尊（上増田町）

不動明王立像の頭髪は、縮毛で頂部に蓮花を載せ二眼を見開き、右の歯は上唇を、左の歯は下唇を噛み憤怒の形相をなしている。胸には瓔珞（胸飾り）をつけ、身には条帛（布を肩から胸、そして腹部へと斜めに垂らし、さらに背面を通って肩へと襷状に）をまとい、腰には裙（腰に巻き付ける布で、襞ができる独特な巻き方）を着ける。左腕は肘から先端を、右腕は肩から欠損している。本来は左手には降参しない者を縛り、仏の世界に引き上げる羂索（青・黄・赤・白・黒の五色の撚った縄）を持つ。右手には貪・瞋・癡（欲深い・怒り恨む・愚かな）の三毒を殺す智剣を握っている。背面の光背はすべての煩悩を焼き尽くすという火焔を負っており、大塚田寮にある。

不動明王は、須弥山（仏教の世界で中央にそびえる高山）のように揺るぎない悟りの心（菩提心）を持っていることから、不動と命名された。揺るぎない心とは、釈迦が成道（仏の悟りを完成）したとき魔を退散させた智慧とその働きをいう。憤怒の形相をして相手を屈服させて人々を救済するという事で、救いを求める多くの人の心を集め信仰された。

＊城南公民館だより「城南」令和３年６月１日発行

196

六地蔵幢（荒口町）

石幢は下部から基礎・幢身・中台・龕部・笠・露盤・九輪・宝珠からなる。龕部の各面に六体の地蔵菩薩坐像が薄肉彫りされている。幢身の西面に「應安四（一三七一）年辛亥十月廿九日」、東面に「奉造立六地蔵為・・・也」と刻字されているが、あとの文字は判読不可能な状態である。観音廃寺の境内にあり、南北朝時代に造立されたもので、この六地蔵幢は北朝の元号を使用しており、南朝では建徳二年にあたる。なお、幢身の為書面と建立年月面の位置が裏表逆に積まれている。この時代は公家政権が急速に無力化し、それに対し武家の単独政権が成立していった。建武の新政を目指した後醍醐天皇であったが足利尊氏と対立し、大和国吉野に逃れ南朝を興したが、武力闘争に敗れ五十七年を経て南朝は消滅した。

仏教の教えでは衆生が死出の旅に向かうとき、生前の行いにより六界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）のいずれかの世界へ行かなければならないという。地蔵菩薩はその六界の入り口の六道にいて迷える衆生を救うという。寺院の門前や墓地の入り口付近に造立されることが多く、平安時代中期以降から六地蔵信仰が盛んになる。石幢の龕部六面に地蔵菩薩が彫られた形態古く、六体を丸彫りの六地蔵が並ぶのは江戸時代からである。

＊城南公民館だより「城南」令和３年７月１日発行

197　妙見宮石堂（新井町）

屋根は流れ造りで、室部右側に「奉造立妙見宮」、「宝暦十三癸未歳（一七六三）十二月吉日」の刻銘があり、赤城神社境内にある。妙見菩薩は北極星あるいは北斗七星を神格化した菩薩である。その御利益は、国土を護り、災害を滅除し、人の福寿を増すという。特に眼病平癒を祈る妙見法の本尊である。なお、静止している北極星は航海の目印となり海上安全の神、また海上貿易で利益を得ていたことから商業の神ともされ民衆の間に信仰が広まった。

妙見信仰は、古代インドに発祥した菩薩信仰であるが、中国に渡り道教の影響を受け、星宿（星座）思想から北極星または北斗七星を神格化した仏教の天部の一つである。妙見信仰が日本へ伝わったのは七世紀（飛鳥時代）で、朝鮮の高句麗や百済出身の渡来人によってもたらされ神仏習合され信仰されるようになった。当初は渡来人の多い関西以西の信仰であったが、朝廷の政策により渡来人が東国に移住させられたことにより東日本にも広まってゆくことになった。なお、妙見信仰の古刹として平安時代初期の『続日本紀』に上野国群馬郡引間（旧群馬町引間）所在の妙見寺に関する記載があり、神亀六年（七二九）大阪府南河内郡太子町の妙見寺より勧請されたと伝わる。

＊城南公民館だより「城南」令和3年8月1日発行

198 宝塔（二之宮町）

下部から基礎・塔身・屋蓋（笠）・相輪の順に積まれており、かつて黒漆が塗られていた痕跡が見られ神社境内にある。そのうちの相輪は下から露盤・伏鉢・請花・九輪・龍車・請花・宝珠である。安山岩製で塔身は上位に首部を持ち甕型で下部はすぼまる特徴から、赤城南麓の宝塔は「赤城塔」と俗称されている。屋蓋はほとんど反りが見られないことから室町時代初め頃の特徴を備えている。宝塔は多宝如来と釈迦如来を本尊とし建てられた塔である。

明和五年（一七六八）の『二宮赤城神社境内図』によれば、かつて宝塔は随身門と拝殿の中間西側にあり、舞台西の広場の鐘楼と対峙する位置にあった。慶応四年（一八六八）三月十七日、明治新政府によって発布された「神仏判然令」は、神仏習合を廃し、神道の国教化を目指すものであった。そのため神仏分離が進められ、神社境内に仏教施設を置くことが禁じられた。しかし、わが国では神と仏は千年余り永く習合信仰されてきた。強制的な廃仏毀釈運動が行われ、全国的に騒乱が勃発し仏像や石仏が失われた。当時、この宝塔は神社の周堀に埋められ保存されていた。昭和五十八年に市重要文化財に指定されている。

＊城南公民館だより「城南」令和３年９月１日発行

199 奪衣婆木像（富田町）

奪衣婆は眼を丸く見開き、牙をむき醜悪の相をなし、胸元の衣類は大きく肌け、肋骨は浮き出て、垂れた胸乳も顕わな木像である。左足は立膝をなし、右手には亡者から奪い取ったと見られる衣類をつかんでいる。像高三十六チセンで六本の寄木により造られており吹地地蔵堂にある。

仏教では人が亡くなった後に最初に出会うのが冥界の官吏といわれる奪衣婆である。奪衣婆は奪衣媼・奪衣鬼・葬頭河婆などといわれる。なお閻魔王の妻または妹ともいわれている老婆の鬼女である。初江王宮の前には三途川（葬頭河）が流れており、向こう岸へ渡るときに罪の軽い者は浅瀬を渡れるが、罪深き者は深淵を渡らなければならない。現世で善業をなした者は川ではなく橋を渡れるという。なお川の渡し賃である六文銭を持たずにやってきた亡者は衣服を剥ぎ取られてしまう。奪衣婆は三途川を渡った淵におり、奪い取った亡者の着物は衣領樹にいる懸衣翁に渡す。衣領樹は着物を枝に掛け、枝がたわんだ状態によって罪の軽さ重さが測られるという。亡者はこの後に衣類を剥ぎ取られた状態のままで、冥府で閻魔王などの十王によって裁かれることになるという。

＊城南公民館だより「城南」令和３年10月１日発行

200 閻魔王木像（富田町）

閻魔王像は、台形状の冠をかぶり、眉を吊りあげ、両眼を見開き、歯をむき、叱咤・憤怒の形相で笏を持つ。中国宋代の裁判官の制服に似た道服をまとっている。像高七十二センで十本の寄木造りで漆が施されており、吹地地蔵堂にある。仏教の密教において焔摩天とも呼ばれ護法神として南方を守護し十二天に加えられた。中国に渡り道教思想と混淆され、やがて日本へ移入された。

閻魔王思想はインドで古代神話の安楽国土の王者とされ、仏教界で餓鬼界・畜生界・地獄界の主となった。閻魔王は人の死後に、生前の善悪を審判・懲罰するという地獄の主神で冥界の総司ともいわれる。初七日から三年間で十王（秦広王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・変成王・泰山王・平等王・都市王・五道転輪王）による十回の裁定を受けることになる。しかし、生前に十王に対し供養をした者は死後の業報（善悪による結果）が軽くなるという。

この思想により庶民の十王信仰が盛んになった。江戸時代には一月と七月の十六日は閻魔王の斎日で地獄の釜の休む日として薮入りといい、奉公人に休みをとらせ、こぞって閻魔王に参詣するようになった。

＊城南公民館だより「城南」令和３年11月１日発行

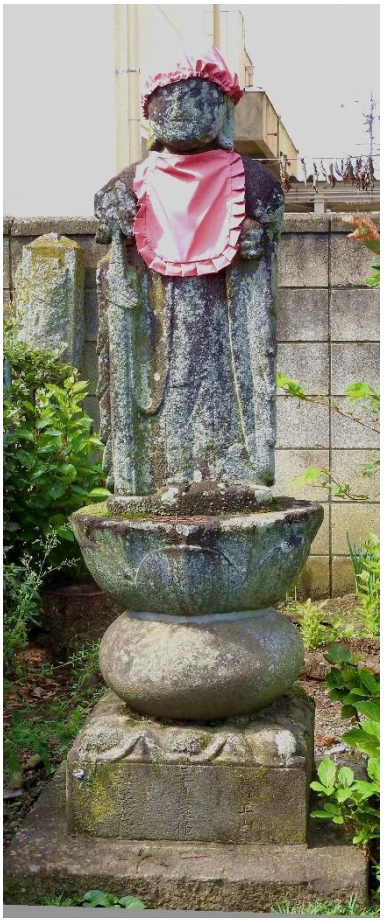
201　地蔵菩薩立像（筑井町）

下部から基壇・基礎・中台・蓮台をあわせ総高一七六センを測る。左手は指を結ぶ形状で、右手は錫杖を握り搗いている。基礎の正面に「醫王山　三千日供粮佛　安養院」、左面には回向文「願以此功徳　普及於一切　我等與衆生皆共成仏道」、背面に「惟時　享保十七年壬子天（一七三二）十月大日吉日」、右面に「一切萬霊　願主　念蓮社譽専入　大徳」の刻銘があり、安養院にある。

地蔵菩薩の姿は、剃髪し袈裟姿で僧形をなし、左手に宝珠を戴き、右手に錫杖を持つ。錫杖は、あちこちを巡るとき、足を踏む先に生物を驚かせ、無益な殺生を避けるために突く。なお地蔵菩薩は、六道にいて衆生を救う六地蔵や、民間信仰で子育て地蔵・夜泣き地蔵・縛り地蔵など多くの信仰がある。

地蔵菩薩は、釈迦牟尼が入滅してから五十六億七千万年の後、弥勒菩薩が次の仏となるまでの間、この世で多くの人々の苦しみや悩みを救う菩薩である。他の菩薩と異なり唯一僧形をしているが、インドにはこのような地蔵像はない。中国の敦煌には坊主頭に帽子をかぶったものがあり、路傍で見かける地蔵菩薩に頭巾かぶせてあるのはその名残であろう。

＊城南公民館だより「城南」令和３年12月１日発行



202

万月供養塔（荒子町）

供養佛は、下から基壇・基礎・竿・蓮台が積まれ、蓮台の上に輪王坐で座す石像で薬師堂にある。左手には宝珠を戴せ、右手は肩から先は欠損している。基礎に「西大室村東大室村 下大屋村」、竿に「万月供養佛 宝暦十三未歳（一七六三）三月吉祥日 法印義存」の刻銘がある。義存という僧侶が、万月の夜を待ち供養をするため、三村より布施を得て造立した。

人類にとって古来より普遍的な信仰の対象は太陽と月である。太陽は西の空に沈んでも翌朝にはまた東の空から変わらぬ姿を現す。常に不変の太陽はすべての生命の象徴とされた。しかし、月は規則的に満ち欠けを繰り返し、生と死との再生のシンボルとされ、人間にとっての生命の象徴と、死後の幸福な夢や憧れを持って信仰されてきた。釈迦牟尼（お釈迦さま）は満月の夜に生まれ、満月の夜に悟りを開き、満月の夜に亡くなったと伝わっている。東南アジアの仏教国では今でも満月の日に祭りや反省などの儀式が行われている。万月供養は本来、仏や菩薩、諸天などに対して行うものであり、その尊敬の念から香や花や飲食などの供物をささげる行為である。

＊城南公民館だより「城南」令和４年１月１日発行

203　宮下の青面金剛塔（東大室町）

青面金剛の梵字塔で、高さ一三二センチ、幅八八センチの自然石に青面金剛の種子「ウーン」が梵字で彫られている。裏面に「寶暦十庚辰（一七六〇）天三月吉祥日」と建立年月の刻字がある。梵字は古代インドのサンスクリット文字で一文字で仏を表現し神秘的に見える。青面金剛は「庚申」の主尊で、江戸時代中期には忿怒の形相の像が彫られ、顔面が青く塗られたので青面金剛と称され、天部に属し帝釈天の眷属（配下）とされている。江戸時代後期には文字塔が多く建立されるようになる。

庚申講とは、暦の十干・十二支の庚と申の日の夜に集まり青面金剛の掛け軸をかけ、翌日の一番鶏が鳴くまで過ごす講である。それは「庚申」の夜に人間の体内にいる三尸の虫が抜け出し、その人の罪過を帝釈天に報告すると、その人の寿命が縮められるのでそれを防ぐため行う講である。青面金剛は、悪獣・病魔・病鬼などを調伏（服従）すると説かれている。申の日に講を行うのは、猿が帝釈天の御先神（神の先駆として現れる）であることから三猿と結びつき、「見ず・聞かず・言わず」で静かに過ごすのが庚申である。

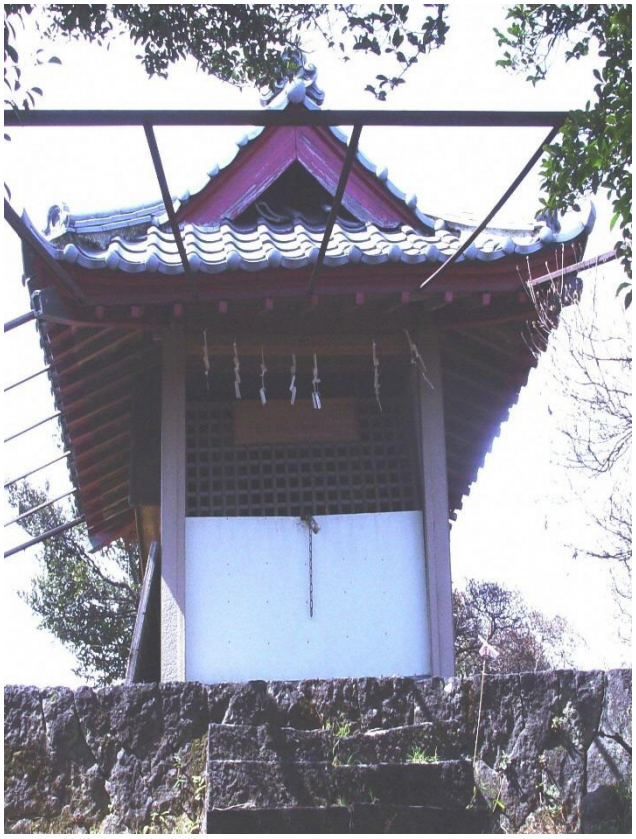
＊城南公民館だより「城南」令和４年２月１日発行

204　五社稲荷社（西大室町）

五社稲荷社は、以前は地田栗（じだぐり）にあり幕末ころに現在地の伊勢山古墳上に移された。しかし、明治三十九年の「神社合祀令」により、四十一年（一九〇八）に鎮守の熊野神社へ合祀された。しかし、地元の強い要望により後に現在地へ戻された。祭礼は八十八夜（五月二日）の日で、養蚕が盛んなころは近郷近在より参詣者が多く訪れ大変賑わった。また、狐は稲荷神の使いとされており、祭礼の際には狐の置物を一つ借りて持ち帰り、翌年には二つ返すという風習がある。現在の社殿は二之宮小学校の奉安殿（ほうあんでん）を、大正十四年に払い下げられ移築された。奉安殿は天皇・皇后両陛下の御真影・教育勅語謄本などを奉安するため戦前まで学校の敷地内に作られた施設である。

五祭神の①絹笠大神（きぬがさだいじん）はオシラ様ともいい蚕の神。②倉稲魂命（うがのみたまのみこと）は稲に宿る神秘的な精霊で、五穀などを司り稲荷神社の祭神。③大己貴命（おおなむちのみこと）は大国主命（おおくにぬしのみこと）など多くの名を持ち、国内平定・国土経営・天下巡行・農業の神。④大宮姫命（おおみやひめのみこと）は産業繁栄の神。⑤保食神（うけもちのかみ）は五穀を司る神。以上、五神を合わせ五社になる。

＊城南公民館だより「城南」令和４年３月１日発行



205　笠守薬師三尊（筑井町）

昔、筑井へある時に姫様がやって来て、ここへ辿（たど）り着いたところ行き倒れになってしまった。村人は姫様が可哀そうだと手厚く看病してあげた。すると姫様は「私がもし亡くなったら薬師様として祀っておくれ。そして、笠をあげてお願いすれば皮膚病をなおしてやる」と、言ったという。その後、お姫様はそう言い終わると間もなく亡くなったという。村人たちはお姫様が言い残した言葉どおり、約束を守って姫様を祀りお堂を建てた。皮膚病にかかると治癒（ちゆ）の願を掛け、治るとお礼に笠をあげるという。また、眼にもご利益があるといい、以前は四月八日の縁日は賑わったという。

笠守薬師三尊像の中央の像は、髪の毛を肩の下まで長く垂らした女人像である。衣服をまとい胸の下に笠を持っている。そして肩から数珠が掛けられ、頭部には笠が二つ載せてある。左右には合掌する小さな女人像が脇侍のように置かれている。三像ともに新しい石像であり、従来の仏式による像とはかけ離れたものである。

＊城南公民館だより「城南」令和４年４月１日発行

206

北宿の道祖神（西大室町）

自然石の台石上に縦長の石を建て「道祖神」と刻銘してあるが、中央部に凹みがあるため「祖」は右端に刻まれている。台石の正面に「右 おおむろ 大まゝ」、中央に「西大ご まへはし」、左側に「左 あかぎ」と道しるべが刻銘されている。

伊邪那岐命は、亡き妻に逢いたくて黄泉国（冥土）へ伊邪那美命を訪ねた。すると、あれほど美しかった妻は腐乱し醜い屍体に変わっていた。体には蛆がうごめきイザナキは恐ろしくなり逃げ帰ろうとした。すると怒ったイザナミは「逢いに来たのに逃げ帰るなんて酷い！それではあなたの国の人を毎日千人殺す！」と恨みを込めて言った。するとイザナキは「では私は毎日子供を千五百人産ませよう！」と言い勝って二神は永遠の決別をした（『古事記』より）。イザナキは逃げ帰り黄泉津比良坂に差し掛かると往く手を遮る幽鬼がおり、それから護ったのが道反大神で、後に塞神と混合し道祖神となった。疫病や悪霊が入るのを防ぐため、集落の入り口付近の道路に建てられるようになり、旅人の安全を守る神にもなった。

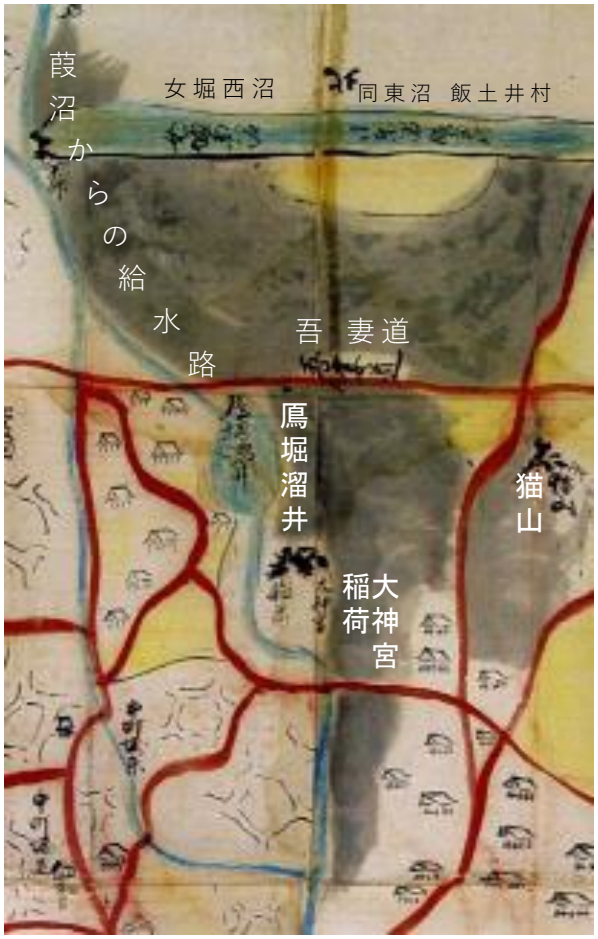
＊城南公民館だより「城南」令和４年５月１日発行

207 鳫堀溜井（飯土井町）

飯土井沼は、吾妻道南の湧水を湛水した沼で、貯水量を増やすため江戸時代に西面と南面をL字形に築堤している。沼の西側集落は水面より低い位置にあるため漏水による被害があった。天保十四年（一八四三）の「飯土井村の絵図」に、飯土井沼は「鳫堀溜井」と記されている。「鳫堀」とは、それが鳫の列飛行に似ていたのでそう記したのであろうか。その貴重な湧水はイデ（井出）と称していた。その湧水は神なす業であるとしてイデガミ（井出神）として崇めていた。そして、永遠の灌漑用水の永続を祈願し「井出上神社」を祀った。

江戸時代には荒子村の葭沼から飯土井沼へ引水するようになり、安定した貯水量が得られるようになった。貯水量が確保されると、享保十二年（一七二七）祭神を倉稲魂命（稲作神）に替え、社号は「稲荷神社」に改号した。しかし、明治政府は復古神道を推進し、「神仏判然令（神仏分離令）」を発令した。それを機に時の宮司により再び以前の「井出上神社」の社号に戻した。現在の築堤は大正十二年に行われ「國能た免心津久し乃里人出築與免多る井出乃堤を」の歌碑がある。

＊城南公民館だより「城南」令和４年６月１日発行



208

夏越の祈願行事

武塔神（建速須佐之男命）が旅の途中で裕福そうな家の巨旦将来に宿を請うと断わられ、しばらく行くと貧しそうな家があった。それは巨旦将来の兄・蘇民将来の家で宿を請うと、快く承諾してくれた。翌朝、出立の時にお礼に「茅で作った輪」を蘇民将来に贈った。「もし集落に疫病がきたら必ず腰に付けよ。そうすれば疫病に罹ることはない」と伝えた。間もなく集落に疫病が蔓延し、蘇民将来の家族は「茅の輪」を腰に付けていたので疫病に罹らず、集落の人々は疫病に罹りほとんどの人は亡くなってしまった（『備後国風土記』）。それは、「夏越の祓」として「茅の輪くぐり」が七月末頃に各所の神社で行われている。

もう一つの夏越の祓は、インドの祇園精舎（釈迦の説法の場）の守護神・牛頭天王を祭神として祀る祇園社で行われる。平安時代に都は疫病が流行し、これを治めるため神輿を奉じて除疫を行い、後に山鉾の飾りをつけ市中を練り歩く祭祀になったのが祇園祭で、夏越の祓として全国へ勧請され広まった。しかし、明治政府の「神仏分離令」により、祭神の牛頭天王は神話の須佐之男命に、社号の「祇園社」は「八坂神社」に替えられた。しかし、現在も牛頭天王のお宮を集落毎戸に「天王廻し」として廻る祓の行事が行われている。

＊城南公民館だより「城南」令和４年７月１日発行

茅の輪くぐり

八坂神社（旧祇園社）

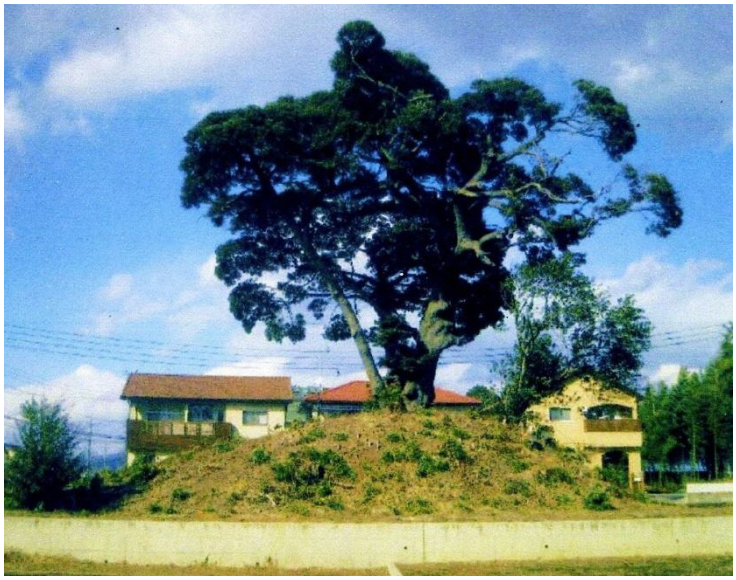
209 荒子杉山古墳（荒子町）

古墳は直径約三〇㍍、高さ約四㍍の円墳で、『上毛古墳綜覧』（昭和十三年刊行）に荒砥一号墳として記載されている。墳丘の東側の四分の一程度が削られていたが、ほぼ形状を留めており土地改良事業地内であったが、その重要性により現状保存された。平成十六年に墳丘の北側、十九年には南の二度にわたり宅地造成により市教委の文化財保護課が試掘調査を行い、各々周堀や石室の入り口が確認されている。

横穴式石室は、輝石安山岩を使用した七世紀中頃から後半期と推定される截石加工の精巧な造りであることが判明した。県指定史跡荒砥富士山古墳（西大室町）とともに貴重な古墳であることが明らかとなった。周辺には大室古墳群や居館跡なども存在することから、有力豪族との関係も窺える古墳である。

現段階では古墳の全容を解明するような本格的な調査は実施されていないが、所有者の理解が得られ現状保存された。七世紀中頃から後半期の截石切組積石室を有していることが推定されている。赤城山南麓における終末期古墳の貴重な資料として、平成二十二年三月十五日に市指定史跡に指定された。古墳の所在は荒子小学校から東南へ約三〇〇の㍍地点にあり、現在は周囲を住宅に囲まれている。

＊城南公民館だより「城南」令和４年８月１日発行



210 富士登山記念碑（上増田町）

神社へ参拝するとき身を清める施設が盥漱盤（かんそうばん）である。正面に富士山の薄肉彫り、下に「㊂」が刻まれている。富士山の左右に「奉献」、右面下に「笂井　増田講社」、左面下に「明治四拾二年拾壱月」刻銘がある。「㊂」は「マルサン」と呼ばれ富士講のうち扶桑教（ふそうきょう）に属す団体である。富士信仰を基盤として、明治維新後に多くの神道教団が組織化され、扶桑教は明治十五年に講社として結成された。扶桑教は、造化（ぞうか）三神（天地開闢（てんちかいびゃく）に現れた天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巣日神（たかみむすびのかみ）、神産巣日神（かみむすびのかみ））並びに、天照大御神（あまてらすおおみかみ）、木花開耶媛命（このはなさくやひめのみこと）を祀っている。大塚田の富士嶽浅間社にある。

登山記念碑は高さ一六八㌢で、碑の基礎周囲はなだらかに山状に岩を積み上げ富士塚になっている。碑の上位を四角に区切り富士山を薄肉彫りしている。下に「三十三度」、「登山記念碑」、左下に「東園書」と揮毫者（きごうしゃ）が刻銘されている。裏面には富士登山講の笂井・上増田講社の一六八名の刻字があり、碑は大正十年十月二十六日に建立された。明治政府は祭政一致を布告し神道の国教化を進め、全神社を政府の直接の支配下に置いていた。

＊城南公民館だより「城南」令和４年９月１日発行

盥漱盤

富士登山記念碑

211

上区寮の甲子天塔（富田町）

「甲子天」の文字塔で、「元治元（一八六四）子　龍集甲　臘月　吉辰　上原講中」と刻銘され、「無喜彌道人」の書である。甲子とは十干十二支の甲と子の年で、龍集は年廻り、臘月は十二月を現わす。甲子年の甲子の日に講の人達が集まり、ご馳走を供え子の刻（夜十二時前後の二時間）まで大黒天を祀るのが甲子講である。ネズミは大黒天の使いとされ、それに因んで子の日に大黒天を祀るのである。上区寮は北部にあり住民が講を催すための施設であった。

大黒天はインドのヒンドゥー教の主神で、シバ神の別名があり仏教に取り入れられた。戦闘の神で黒色忿怒の面相をなしている。インドや中国では古くから寺院の守護神とされ、豊饒を司る神でもあった。わが国では護法善神とし食堂に祀られている。後に大黒天と出雲の大国主神は習合され同一信仰されるようになった。近世以降は恵比須と共に福の神の代表的な存在となった。七福神の一神になっているが、我が国出身の神は恵比須のみで、毘沙門天・弁財天・大黒天はインド、布袋・寿老人・吉祥天は中国の神である。

＊城南公民館だより「城南」令和４年10月１日発行

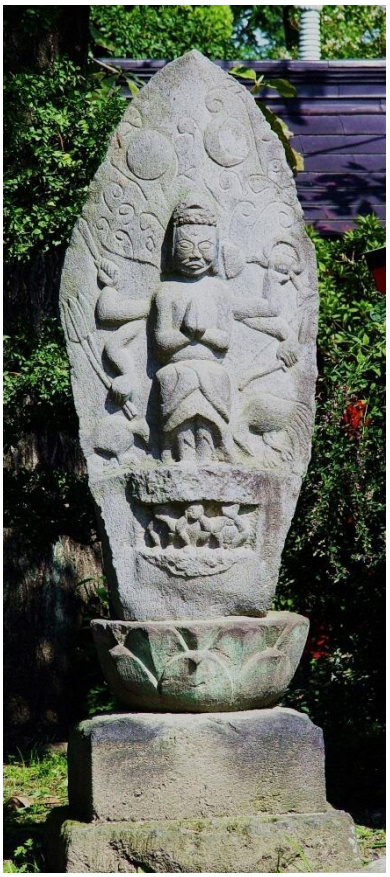
212

青面金剛塔（二之宮町）

青面金剛は、舟型光背に六臂（腕）、三眼の忿怒像が半肉彫りされており庚申の主尊である。光背上位の雲文に日輪・月輪を配す。向かって左の日輪は日天子観音菩薩、右の月輪は月天子勢至菩薩を現わしている。人の体内にいるという三尸の虫が、その人の罪過を天帝に告げると、それによって命が縮められるという。それを防ぐため夜から翌日一番鶏が鳴くまで寝ずに講は行われ、足下の左右には鶏がしつらえてある。青面金剛は青く塗られているのでその名称がある。第一手は正面で金剛合掌印を結び、左の第二手は羂索（五色の糸を撚った綱）を持ち、左の第三手は弓、右の第二手は宝棒、右の第三手は矢を持っている。下部に三猿がしつらえてあり慈照院の境内にある。

庚申の主尊である青面金剛は帝釈天の眷属（従者）ともいわれ、悪獣・病魔・病鬼などを調伏すると説かれる。帝釈天の御先神が猿であることから庚申の申と結びつき、また三猿の「不見、不聞、不言」は孔子の三緘（三つの封じ）の故事の教えを示している。下部に「上州勢田郡二宮村光明院　久保田弥八　黒崎□□　白木□八　元禄七甲戌天（一六九四）十月廿六日」の刻銘があり、江戸時代前期に二之宮村に光明院という寺が存在していた。

＊城南公民館だより「城南」令和４年11月１日発行



213 村主の泉（泉沢町）

伊勢崎・大胡線にかかる大正用水の橋を渡り、南へ約四〇〇㍍の右側にかつて泉が湧いていた。昔のこと、里人が山へ薪（まき）を取りに行き、夕方に薪を取らず酔っぱらって帰ってきた。何を聞いてもにやにや笑って答えず寝てしまう。ある日、後をつけると谷のほうから泉を汲（く）んで道端で飲んでいた。そこで谷へ降りてみると底から水がこんこんと湧き出していたので手ですくって飲んでみた。なんとそれは歯に沁（し）み透るほど冷たい酒であった。

山へ薪取りに行った人が薪を取らず酔って帰ってくる原因が分かると、思わずそばに落ちていた馬の草履（ぞうり）を湧き出し口に突っ込んで帰った。後日、また薪取りの人が甕を持って酒を汲みに谷に降りたら馬草履が湧水口に突っ込んであった。それを取り払い甕に汲んで飲んでみたら、それは酒ではなくただの清水だった。何とも納得いかないような不思議な気持ちになり、また今まで薪取りに行くと言っては途中で酒を飲んでいたという行為に対し自責の念に駆られ、後味の悪さを感じながら日々を過ごしたという。以降、そこから酒は全く湧き出ることは無かった。教訓めいた伝説である。一説に大正用水が掘られてから湧水が無くなったというが、今はその痕跡も見られない。

＊城南公民館だより「城南」令和４年12月１日発行

村主の泉（『前橋市城南地区の民俗』より転写）

214 新井沼（新井町）

新井町は南北に細長い形状をしており、最北の地点では標高約八十七㍍、南端部は約七十㍍で緩やかな南傾斜地帯である。東西に横断する農免道路の北に新井沼があり水田へ灌漑用水として供給している。沼の水源について古くは泉沢とされている。伊勢崎・大胡線を南に向かい大正用水の橋を渡り、南約四〇〇㍍の右側にかつて村主（すぐろ）の泉という湧水があった。その湧水は下大屋・荒子を経て二之宮と飯土井境を南流し江竜川と称される。それから分水し新井沼へ引水しており、その引水路が通過する付近の地名を百々（どうどう）という。百々とは水が音をたてて流れるさまを意味する地名である。

天保五年（一八三四）の『上野国郷帳』によれば荒砥地区十一カ村の石高は以下のとおりである。二之宮村（一三六四石余）、西大室村（一二三〇石余）、富田村（九七一石余）、東大室村（五五八石余）、泉沢村（五一二石）、荒子村（四二三石余）、新井村（四一八石余）、荒口村（四一三石余）、飯土井村（三六〇石余）、今井村（三六五石余）、下大屋村（三三一石余）の順である。新井村は新井沼の貯水により第七位の石高を保っていた。

＊城南公民館だより「城南」令和5年1月1日発行

215

大國神塔（東大室町）

中央に「大國主神」と行書で大書され、裏面に「元治紀元甲子歳十一月甲子日」と刻銘されている。元治元年（一八六四）、甲子年の甲子日の建立である。この塔は甲子大黒天の信仰であることを刻銘が示している。古代中国の陰陽道で十干の首（一番目）の甲と、十二支の首の子の組合せで、甲子の年と甲子日が最良の年日とされた。それは子（ネズミ）は大黒天の使者とされているからである。建立年が甲子年であれば「大國」と記されていても出雲の「大國主神」ではなく、「甲子大黒天」信仰である。わが国へ大黒天信仰が伝来し、両神は共にダイコクと音読みされるため後年に同一習合神化し信仰された。

大黒天はインドのヒンドゥー教の主神でシバ神の別名を持つ。仏教に取り入れられ、寺院の守護神となり豊穣を司る神として信仰された。その大黒天信仰は平安時代に最澄によって我が国へもたらされた。その後、台所の守護神から福の神の一つとなり頭に頭巾をかぶり左肩に大袋を背負い、右手に小槌を持って米俵を踏まえる姿になった。やがて商売繁盛や農家では田の神として信仰を集めるようになった。

＊城南公民館だより「城南」令和5年2月1日発行

216

蚕影山石祠（小屋原町）

屋根は流れ造りで四面に唐破風が備えられており、基壇は三段の石積みによって造られている。明治十年（一八七七）二月吉日に、小屋原村を中心に二十三カ町村の講の人達によって建立され稲荷神社境内にある。「講中」と刻銘されている文字の間には繭玉がしつらえてある。蚕神は、オシラサマ、衣笠様、蚕影様、蚕神様などと呼ばれている。毎年初午（二月初の午の日）、一月十日、二十日などに祀られた。それは養蚕農家の神棚に米粉を蒸して繭玉をつくり、桑の枝に繭玉を付けたものを神棚の前の天井に飾り祀っていた。しかし、中国の安価な生糸や化繊に押され日本の養蚕は衰退し最近は桑畑もほとんど見られなくなった。

蚕影社の本源は茨城県筑波郡筑波町の蚕影山神社とされている。北天竺国（インド）に、キュウチュウ国がありリンイ大王とコウケイ皇后に間にコンジキ姫という娘がいた。しかし、母が病死し後后を迎えたが、度重なる虐待に父王はその危機から逃れさせるため桑の木の舟に乗せ沖へ流した。流れついた所が常陸国豊浦（茨城県日立市）だったという。そして姫の屍が蚕となったので大切に育て、姫は蚕の神として祀られたという伝説が残る。

＊城南公民館だより「城南」令和5年3月1日発行